

「ずーっと。」
人と社会を支える



溪仁会グループ

CSRレポート2019

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT 2019

 溪仁会グループ

医療
法人 溪仁会

社会福祉
法人 溪仁会

株式
会社 ソーシャル

医療
法人 稲生会



【シンボルマークについて】

溪仁会の頭文字であるKをモチーフに、当グループの理念を表現しています。その形状は人と人の支え合いに基づいた「安心感と満足の提供」、勢いよく真っ直ぐに立ち上がるさまは「変革の精神」を表しています。ブルーのカラーリングは、「プロフェッショナル・マインド」および「信頼の確立」をひたむきに追求する、誠実さをイメージしています。

溪仁会グループ CSRレポート 2019

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT 2019



編集方針

溪仁会グループは、2006年から「CSRレポート」(CSR=Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任)を発行し、当グループの取り組みや考え方をお伝えしています。

2018年度は、中期経営計画「ビジョン2020」に基づき設定される年度の経営方針の重点目標を軸に、「地域」「組織」「人財育成」「サービスの質向上」の4つのテーマで編集しています。また、巻頭特集では2018年9月の北海道胆振東部地震への対応を振り返り、地域の安全・安心を担う機関としての責任を改めて見つめました。社会的責任の国際規格であるISO26000への意識も継続しています。

第三者意見は、CSR分野に詳しい中央大学全学連携教育機構客員教授で、日本経営倫理学会理事の荻野博司氏をお願いいたしました。ご協力いただいた皆さんの声は、当グループの今後の事業の在り方や活動内容の検証に役立て、CSR活動の新たな展望につなげたいと考えています。

報告の範囲

当グループの2018年度(2018年4月～2019年3月)の活動やデータを中心に、2017年度以前や2019年度以降の活動情報も記載しています。

バックナンバーについて

「CSRレポート」のバックナンバーおよび各病院・施設・事業の実績データを掲載した「年次報告書」は、当グループのWebサイト上で公開しております。URL <http://www.keijinkai.com>

次回発行について

次回CSRレポートは、2020年11月を予定しています。

●発行
医療法人溪仁会 法人本部 2019年11月

●お問い合わせ先
医療法人溪仁会 法人本部
医療福祉連携部 広報課
〒006-0811
札幌市手稲区前田1条12丁目2番30号
溪仁会ビル3F
TEL 011-699-7500 FAX 011-699-7501
E-mail editor0110@keijinkai.or.jp

CONTENTS

溪仁会グループの社会的使命..... P04
溪仁会グループの事業理念..... P05

巻頭特集 **北海道胆振東部地震 REPORT**
～あの日の震災から私たちが学んだこと～..... P06

溪仁会グループのCSR活動

Actions2018..... P12

第1章 **地域への取り組み**..... P14

第2章 **組織への取り組み**..... P24

環境への取り組み..... P29

第3章 **人財育成への取り組み**..... P30

第4章 **サービスの質向上への取り組み**..... P36

TOP MESSAGE

医療、保健、福祉の複合グループとして より一体感を高め、組織の変革を図る

溪仁会グループ最高責任者 医療法人溪仁会 理事長 田中 繁道..... P44

第三者意見..... P46

ISO26000対比表..... P47

溪仁会グループマップ..... P48

溪仁会グループ一覧..... P50



溪仁会グループの 社会的使命

「ずーっと。」 人と社会を支える



私たち溪仁会グループは、
社会的責任(CSR)経営を推進します。
高い志と卓越した医療・保健・福祉サービスにより、
「一人ひとりの生涯にわたる安心」と
「地域社会の継続的な安心」を支えます。

2014年10月1日制定



溪仁会グループの事業理念



安心感と満足の提供

Offering a Sense of Security and Satisfaction

プロフェッショナル・マインドの追求

Attaining a Professional Mind

信頼の確立

Building the Foundations of Trust

変革の精神

Developing the Spirit of Change

グループ経営の理念とその体系

私たち溪仁会グループは、「ずーっと。」を合言葉にCSR経営を推進してきました。この「ずーっと。」を具体的な理念として規定し、社会的責任をグループ全体で約束し、実現していくために、2014年10月1日に「溪仁会グループの社会的使命」を制定しました。医療・保健・福祉のサービスの質(公益性)を「人」、経営の質(継続性)を「社会」という言葉で表現しています。

「溪仁会グループの社会的使命」は、事業理念や各種達成目標の上位概念として、経営の根幹を成すものです。また、溪仁会マネジメントシステム(KMS)を、私たちの活動全体を支え、CSR経営を確かなものにする取り組みとして位置づけています。



北海道 胆振東部地震 REPORT

～あの日の震災から私たちが学んだこと～

2018年9月6日午前3時7分、北海道胆振地方中東部を震源とするM6.7、最大震度7の地震が発生しました。多くの死傷者を出し、さらに北海道全域の停電=ブラックアウトを引き起こした大震災に、溪仁会グループの各病院や施設はどのように立ち向かい、何を学んだのか——。当時の対応を振り返るとともに、地域の方々を支える者としての使命や責任、未来に向けた災害対策などをお伝えします。



地震発生、そしてブラックアウトへ そのとき病院や施設で起きていたことは

想定外の長時間停電がもたらしたこと

溪仁会グループでは、東日本大震災をはじめ、日本各地で毎年のように起きる大規模自然災害での事例を参考に、これまでも災害に強い組織づくりを推進してきました。各病院や施設において、防災訓練や研修の実施、緊急事態発生時に事業継続や復旧を図るためのBCP(Business Continuity Plan=事業継続計画)の策定や防災マニュアルの作成などを行い、災害に備えてきました。

北海道胆振東部地震では、当グループの病院や施設への大きな被害はなく、外壁の一部が落ちたり、排水管がずれたりといった軽微なものが多いでした。また、患者さんや利用者さん、職員を含めて、けがなどはなく、日頃から防災訓練を行っていたことで、大きな混乱も起きませんでした。

その一方で、想定外だったのが長時間にわたる停電の発生でした。各病院では停電とともに非常用発電に切り替わりましたが、一部

の病棟では停電が発生しました。そのため電子カルテではなく紙のカルテで対応したケースもありました。介護施設では一部で自家発電機がなかったり、あっても許容量を超えて発電したために停止してしまうトラブルも発生しました。また、エレベーターなどの設備が使えず、食事や物資を階段を使って運んだり、施設管理担当の職員が泊まり込みで対応したところもありました。

患者さん、利用者さんを守るための行動を第一に

各病院では地震後、すぐに災害対策本部が設置され対応に当たりました。病棟での患者さんの状況確認のほか、建物の被害状況の確認、職員や家族の安否確認などを進めました。また、外来診療は原則休診とし、可能な場合は入退院を延期するなどの判断を行いました。同様に、各施設でも利用者さんの状況を確認。訪問や通所のサービスを休止したところも多く、施設によっては在宅の利用者さんに対して、自宅訪問や電話連絡による安否確認も実施しました。

すべての病院・施設で防災マニュアルが整備され、非常食や備品の備蓄が計画的に進められていたため、3日程度の食料が確保されていたことは大きな強みでした。停電によって物流がストップし、食材の納入も止まりましたが、入院患者さんや利用者さんの食事は備蓄食材を使うことで対応することができました。

今回の震災では、職員たちも長時間停電の被災者でしたが、患者さんや利用者さんのために思い、誰もが最善を尽くそうと努力しました。大きな災害を乗り越えることができたのは、そうした職員一人ひとりの使命感と尽力があったからでした。



DMAT/JMATの活動

手稲溪仁会病院には、災害急性期に活動するための専門的な訓練を受けたDMAT(災害派遣医療チーム)、DMATと入れ替わりで被災地を支援するJMAT(日本医師会災害医療チーム)が配置されています。今回の北海道胆振東部地震でも両チームが出動し、被災地や病院への支援を行いました。

DMATは9月6日から8日にかけて、北海道の要請を受けて11名が出動。停電で人工呼吸器が使えなくなった病院の患者さんを別の病院に搬送したほか、医療機関への巡回訪問による情報収集、ドクターヘリによる被災病院からの患者さんの転院搬送などを行いました。JMATは9月9日から16日にかけて、16名が厚真町とむかわ町に出動。むかわ町鶴川厚生病院での医療支援活動と避難所巡回活動をDMATより引き継ぎ、外来診療や病棟管理などの支援、病院職員へのサポートなどを担当しました。



想定外の長時間停電がもたらしたこと

当グループの病院・施設ではBCPや防災マニュアルが整備されていましたが、今回の震災では事前のシミュレーションが不十分であったという反省点が多く出されました。職員の連絡体制や役割分担の明確化、備蓄食料や備品類の量・種類など、被災して初めて気づくことも多く、特に職員用の食料備蓄はどの施設も準備していませんでした。また、停電がもう少し長引いていたら、医療材料や発

電機の燃料などにも影響が出た可能性があります。

BCPが職員に浸透していなかったり、十分に活用できない場面があったことも大きな反省点です。今回の震災はまだ暖かい時期でしたが、冬季に発生した場合はさらに状況は過酷になることも予想され、そうした想定も必要なのではないかという意見もありました。

今回の震災での経験を通して、多くの課題が浮き彫りになりました。その反省をもとに防災体制を見直し、より災害に強い組織づくりに取り組んでいく考えです。

北海道胆振東部地震における対応と今後の対策

REPORT 1 定山溪病院 —— 地域からのサポートが大きな力に

定山溪病院では、以前から防災意識の向上に取り組んできました。地震発生から20分後には施設管理の担当者が出動し、被害状況の確認や停電への対応を実施。職員送迎バスの運行を委託している地元バス会社の協力を受けて、職員の多くが出動することができました。

日頃から防災委員会による啓発活動や非常時の連絡体制の整備などを行ってきたことで、大きな混乱は起きませんでした。しかし長時間にわたる停電では想定外の事態も多く、特に食材調達では地域の方々からのご協力で支えられました。今回の震

災での経験を活かし、防災マニュアルの改定や初動体制の在り方などを再検討する作業を進めています。



院長をはじめ各部門の責任者が集まり、対応を協議しました



近隣の農家さんなどの協力で米や野菜などを確保できました

職員の安全にも配慮し 災害に強い病院づくりを

看護部 部長
田中 かおり



私は手稲溪仁会病院の救命救急センターでの経験や北海道災害看護コミュニケーション(Ezo看)での学びから、常に防災の大切さを職員に伝えてきました。年に2回、防災訓練を実施していることや、震災の前月にも停電が発生していたことで、ある程度の心構えはできているつもりでした。

しかし震災に直面してみると、その場で判断を求められることが多く、認識の甘さを痛感しました。例えば、併設の院内保育所に、普段は利用していない職員のお子さんも受け入れることになりましたが、その分の食事をどうするのかということまでは考えていませんでした。また、重油をくみ上げるポンプが停止したため、職員が重油を手でくみ上げて発電機に送るということもありました。いずれも職員の努力や工夫で乗り切りましたが、防災とは何かということをあらためて考えさせられました。

今回の経験を受けて、現在は防災委員会が防災マニュアルの改定に取り組んでいます。災害に遭ったとき、医療に携わる者として後悔することがないように、職員の誰もが全力を尽くすことができる防災体制をめざしています。

地域の協力で食材を確保 備蓄食料の見直しも必要に

栄養科 科長
北野 詩歩子



当病院では食料の備蓄を3日分としていました。震災2日目から食材の納入が止まり、復旧の見通しが立たないことから、非常食は極力使わず温存しようと決めました。科内で慎重に検討を行い、入院患者さんにはきちんと3食を提供しよう、そのための食材を確保しよう、ということになりました。

経営管理部のスタッフが食材の手配に当たり、職員の実家や地域の農家さん、道の駅、地元のスーパーなどの協力を得て、野菜や米などを確保することができました。食材の配送が12日に再開するまで、地域の方々のご好意に助けいただきました。

震災後には今回の経験を踏まえ、備蓄食材を大きく見直しました。3日分の食材に加え、冷凍食材と乾物で4日間対応できるようにし、トータルで1週間分の食材を備蓄する体制に変更しています。断水も想定して、水を使わずに食べられる食品も導入しました。

物流が止まれば患者さんの生命に関わる事態も起こり得ます。生命を預かっているという意識を持ち、あらゆることを想定しながら対策を考えていきたいと思います。

北海道胆振東部地震における対応と今後の対策

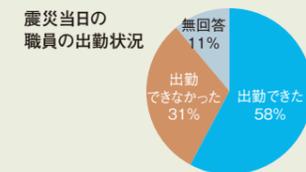
REPORT 2 コミュニティホーム白石 —— 職員が力を合わせ、サービスの維持に尽力

コミュニティホーム白石は地震発生から間もなく職員が出動し、併設のショートステイセンター、隣接するグループホームとあわせて、利用者さんの安否や建物の被害状況などを確認しました。その後、提供可能なサービスや職員のシフト変更、食事の対応などについて話し合いながら判断。通所サービスや訪問リハビリテーションは完全休止、訪問介護は介護ニーズの高い方を優先し、一部の実施を決めました。また、6日夕方には、札幌市の要請を受けて福祉避難所を開設し、一般の避難所では生活が難しい高齢の方1名を受け入れました。

停電が長期化する中で、最大の課題となったのが水の供給でした。自家発電機がなかったため、停電と同時に給水ポンプが

停止しました。また、利用者さんに提供する3日分の食料は備蓄していましたが、食材の納入が止まり、備蓄食を使用してしまっただけなのか、という職員の迷いもありました。

こうした反省をもとに、BCPを改定。備蓄食料の強化や冬季の災害想定、具体的な判断基準などを明確にしました。



約4割の職員が徒歩で出動し、自家用車と自転車による出動が3割ずつでした



防災講習などを実施し、災害に強い施設づくりを進めています

実践的なBCPに改定し 災害に強い施設づくりを

副施設長
兼 経営管理部 部長
宮越 良彦



当施設では毎年防災訓練を実施し、2017年にはBCPを作成し、以前から災害に備えてきました。BCPの机上訓練も行っており、今回の震災ではBCPに基づいて対応することができました。しかし、長時間停電への具体的な対策は示されておらず、その場で判断することも多くありました。職員からも「判断基準があれば良かった」という意見が出ました。

予想しないことの連続でしたが、職員は強い使命感を持って対応に当たりました。給水ポンプが停止したときは、職員たちが地下の受水槽から手で水をくみ上げ、バケツリレー方式で運びました。自宅か

ら何時間も歩いて出動した職員もいましたし、在宅の利用者さんの安否確認を行ったときは、連絡がつかない方の自宅まで訪ねていたりもしました。そうした職員の行動や思いはとても尊いことですし、それがあったから災害を乗り越えることができたことに感謝しています。しかし、職員を守るという観点からは、もっと慎重に行動基準を決めておくべきだった、と反省しています。

震災後、当施設ではBCPを大きく見直しました。非常用発電機を給水ポンプにつなげられるようにし、職員への連絡方法をメール配信にしました。食料の備蓄に職員分も加え、冬季の災害を想定して灯油ストーブを購入しました。さらに災害時の行動基準も明確にし、職員の安全にも配慮しました。

今回は当施設に福祉避難所が開設されました。初めての経験でしたが、受け入れに迷いはありませんでした。地域で暮らす方々の健康や生命を支えることも私たちの大切な役割と認識し、災害時の支援の在り方を考え続けていきたいと思います。

リハビリテーションによる被災地への支援活動

災害時の課題の一つが、被災した方々への生活支援です。特に不自由な避難生活の中では、エコノミクス症候群や身体・生活機能の低下などが起こりやすく、迅速かつ継続的な支援を行うことが必要とされます。

北海道胆振東部地震では、溪仁会グループの各病院のリハビリテーション部が、被災地での支援活動を行いました。札幌溪仁会リハビリテーション病院ではDoRAT(北海道災害リハビリテーション推進協議会)の対策本部が設置され、医師や理学療法士らが活動に参加。9月11日から20日にかけて、被災地の避難所環境整備、障がいのある方への対応、不活発予防の体操指導などを行いました。また、同病院テクノエイドセンター(P37参照)は、福祉用具・デバイスを集め、現地へ送る支援活動を行いました。

その後、手稲溪仁会病院のリハビリテーション部が厚真町で「災害復興支援リハビリ」を実施。10月16日から11月27日にかけて合計9回、避難所での不活発予防の体操指導、仮設住宅での転倒リスクの調査や改善のアドバイス、運動指導などを行いました。

こうした災害支援も溪仁会グループの使命の一つです。被災された方々のために何ができるかを考え、支援体制の強化に取り組んでいます。



BCPや防災体制を見直し、災害対策を強化

北海道胆振東部地震での経験と反省を踏まえ、浜仁会グループの病院・施設では、BCPや防災マニュアルの再整備、長時間停電や冬の災害発生を想定した防災訓練など、災害に強い体制づくりを進めています。

各病院では長時間停電への備えとして、非常用発電機の導入や更新、自家発電機による電力供給範囲の見直し、備蓄燃料タンクの増設、燃料くみ上げポンプの更新を実施。さらに、職員用の非常食と飲料水の備蓄、災害発生時の自動参集基準の明確化、職員の安否確認システムの導入を検討し、一部の病院では完了してい

ます。

社会福祉法人浜仁会は、各施設へのランタン型電灯の購入や、非常用発電の施設内配線と非常時専用コンセントの配置、燃料供給会社との災害時燃料供給契約の締結などを決定。職員への連絡体制や情報共有方法の見直しなども進めています。

災害対策の強化は、地域の方々の生命を守る者としての責任の一つです。同時に、職員が安全に災害支援活動ができる環境を整えることも大切な義務と考えています。皆さんの安全・安心の基盤の一つとなるために、より災害に強い体制づくりに取り組んでいきます。

北海道胆振東部地震における対応と今後の対策

REPORT 3 きもべつ喜らめきの郷・るすつ銀河の杜 —— 地域と連携し、支え合う体制づくりを

きもべつ喜らめきの郷・るすつ銀河の杜では、停電後、自家発電による非常用電源に切り替わり、必要最低限の電気は確保できました。また、両施設ともポータブルの発電機を1基ずつ備えていたため、冷蔵庫とつないだり、調理に使うなど、柔軟に対応することができました。しかし、きもべつ喜らめきの郷はエレベーターが停止したため、6日の昼以降の食事は職員が手作業で各ユニットに運びました。

地域の方の安否確認については、きもべつ喜らめきの郷では訪問介護の利用者さんの自宅にうかがい、状況を把握。るすつ銀河の杜でも、独居で要介護認定を受けている方への戸別訪

問を留寿都村と連携して実施しました。

両施設はそれぞれ喜茂別町、留寿都村と福祉避難所の協定を結んでいます。今回の災害では開設はされませんでした。災害時の受け入れ体制を具体的に考える機会になりました。今後は町村との連携をより深め、内部体制を整えるなど、地域貢献を果たすための取り組みを進めています。



非常用電源に炊飯器などをつないで使いました

災害への備えや対応を地域と共に考えていきたい

副施設長
佐々木 貴紀



今回の震災では、自家発電による非常用電源は確保できており、ポータブルの発電機とあわせて臨機応変に使いながら、できるだけ通常通りのサービスを提供するように努めました。「こういうときだからこそ、普通のケアをしよう」という職員の意見から、おしぼりタオルを温める機械を非常用電源につないで使い、利用者さんに快適に過ごしていただけるようにしました。また、ポータブル発電機は屋内では使えないため、電動ベッドの上げ下げをするときは、そのベッドのある部屋の外に発電機を移動して、長いコードをつないで対応しました。

一方で想定外のこともありました。自家発電機は6時間ごとに給油の必要があり、そのたびに機械を止めなければならないのが煩雑

でした。また、きもべつ喜らめきの郷では、自家発電機のブレーカーが落ちてしまうトラブルがありました。メーカーの対応が得られず、困っていたところを助けていただいたのは、顔見知りになっていた町内の農機具販売店の方でした。

利用者さんのご家族がおにぎりを作って差し入れてくださったり、町内の小売店から食料の支援をいただいたりということもありました。地域の皆さんの温かなサポートに、日頃から人間関係を築いておくことの大切さを強く感じました。

災害を経験して考えさせられたのが、福祉避難所が開設された場合の対応でした。限られた条件の中で、どのように要介護・要支援の方を受け入れれば良いのか。役場などとも話し合いながら、具体的な対応を検討する必要があると感じました。また、今後は地域と連携した活動として、住民の方も交えた防災訓練なども提案していきたいと考えています。社会を支える福祉施設としての役割を果たすために、さまざまな方々と連携を図り、地域貢献を果たしていきたいと思っています。

北海道胆振東部地震における対応と今後の対策

REPORT 4 手稲浜仁会病院 —— 災害拠点病院としての使命を果たすために

手稲浜仁会病院は2011年に災害拠点病院の指定を受け、災害時の救急医療体制の強化を図ってきました。北海道胆振東部地震では、午前3時50分に災害対策本部を立ち上げ対応を協議。一般外来や定期検査などの中止を決定し、原則として救急患者さんの優先受け入れの判断を行うこととしました。

停電への対応は、発生直後から自家発電が始動し、必要な電気を賄うことができました。しかし、発電用の燃料は3日分を備蓄していることになっていましたが、消費量が想定を大きく上回り、30時間程度しかもたないことがわかったため、臨時で重油の供給を手配することになりました。

停電が長期化したことで、地域内の医療機関から透析患者さん(195名)や妊婦さん(9名)、人工呼吸器を使用している患

者さん(11名)の受け入れ要請があり、透析治療や転院対応などを行いました。また、在宅患者さんの人工呼吸器や酸素供給装置、補助人工心臓の充電にも対応しました。

地域の医療機関との連携や在宅患者さんへの支援など、災害拠点病院としての機能を果たすことができた半面、自家発電の供給能力の問題や行政との情報共有の難しさ、職員への情報伝達不足が課題になりました。今回の災害で得た教訓を活かし、より災害に強い体制をめざしていきます。



災害対策本部では、随時入ってくる情報の整理や検討、判断を行いました

地域の医療機関と連携し 生命を守る取り組みを推進

院長
成田 吉明



当病院は災害拠点病院の指定を受けて以来、大規模災害を想定した訓練を行っており、今回の震災でも初動の対応はほぼ訓練通りに進めることができました。初めて導入して好評だったのが臨時のブリーフィング(情報説明)でした。各部門の責任者を集めて、朝と晩の2回実施しましたが、本部に入ってくる情報を現場に伝えるのに役立ちました。

想定外だったのがブラックアウトでした。長時間停電のシミュレーションはしておらず、予想していないこともありました。ほかの医療機関からの患者さんの受け入れについては災害拠点病院としての役割を果たすことができましたが、透析依頼はニーズが多く、通常は4時間透析が望ましいところを2時間に短縮し、6日・7日ともに深夜まで対応しました。

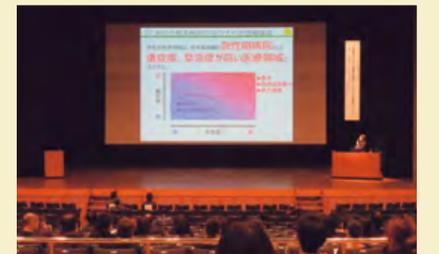
最大の問題は自家発電の重油消費量でした。燃料の備蓄には余裕があると考えていましたが、CTやMRIなども稼働させ、通常に近い医療を提供したことで、想定より燃料を消費したのは誤算でした。もう一つの問題は職員への食事提供でした。入院患者さんについては十分な食料を備蓄していましたが、職員用の食事は盲点でした。2日目からは職員向けに炊き出しを行いました。この部分は大きな反省点となりました。

こうしたことから職員用の食料の備蓄を決め、備蓄燃料の増強や患者さん用の備蓄食料の拡充なども検討しています。また、BCPを見直し、職員の自動参集ルールの明確化や災害時の記録係の配置などを決めました。

考えさせられたのは、在宅患者さんへの支援の在り方でした。今回の停電で、人工呼吸器や人工心臓を使われている方が地域に多くいらっしゃる事がわかり、そうした方の情報をあらかじめ医療機関同士で共有できるシステムの必要性を強く感じました。今後は情報共有の仕組みづくりを地域に働きかけ、手稲地区からテストケースをつくっていければと考えています。

役職者を対象にBCP研修会を開催

2018年11月1日、役職者を対象に「浜仁会グループBCP研修会」を開催し、184名が参加しました。「災害時および、災害後の病院としての対応・管理について」と題した恩賜財団済生会熊本病院副院長・看護部長の宮下恵里氏の講演では、2017年4月に起きた熊本地震での活動紹介のほか、BCPの策定に必要な考え方やプロセスについてご教示いただきました。北海道胆振東部地震の後、当グループで急務となっているBCPの見直しに役立つ大変有意義な研修会となりました。



Actions 2018

溪仁会グループは創立以来、医療、保健、福祉のサービスを展開し、切れ目のない連携体制によって、シームレスなサービスを提供してきました。その間社会情勢は変化を続け、さまざまな困難や新たな課題が生まれています。地域の皆さんの安心は、地域全体の体制が整って初めて生まれるもの。それに対し、溪仁会グループは、どのようなサービス、役割を果たせるのか……「あるべきすがた」を自らに問い続け、その実現をめざしています。



溪仁会グループが重視する活動とテーマ

溪仁会グループでは「あるべきすがた」を実現していくために、中期経営計画「ビジョン溪仁会2020」に基づき、毎年経営基本方針を策定しています。組織がめざす方向性や果たすべき責任を見据えた、2018年度の活動をご報告します。

第1章 地域への取り組み

医療、保健、福祉に携わる事業者は、地域住民を中心として、各々の事業・サービスが連携しながら住民を取り巻くようにサービスを提供していく、地域包括ケアシステムの構築を求められています。溪仁会グループは、グループの各事業所が地域の各機関や住民の方々とつながるだけでなく、地域に住む方々を結びつけ、ネットワークを形成していくことにも各事業所や職員が役立てると考え、地域と連携したさまざまな活動を行っています。

第2章 組織への取り組み

溪仁会グループには社会的使命と事業理念があり、その下で将来を見据えたビジョンに基づき活動を行っています。それらを職員と共有し、職員自身の成長と合わせて組織の成長を支えるマネジメント力を養ってもらうことで、強い組織として一体となった活動を行うことができます。その上で溪仁会ならではの「独創性」をもった、溪仁会ブランドの進化を追求していきます。

第3章 人財育成への取り組み*

溪仁会グループの活動の一つひとつを担う職員には、技術と知識のスキルアップを図る戦略的研修で個人の成長を促しています。ダイバーシティに取り組み、活躍できる職場づくりも個人の能力の発揮のためには大切なことです。さらに、未来を見据えた人財確保として、医療、福祉の仕事の魅力を地域に広く伝えていく活動にも力を入れています。
*溪仁会グループでは人材を宝ととらえ、「人財」と表記しています。

第4章 サービスの質向上への取り組み

地域をけん引する医療、保健、福祉のトップランナーであることが、溪仁会グループの社会的使命を実現するためには不可欠だと考えています。提供するサービスは常に質の向上をめざし、さらにその品質は客観的根拠に基づくものでなければいけません。成果・効果を確認して検証し、PDCAサイクルを繰り返すことで、社会が求めるものと一致するサービスを実現していきます。

エスディーゼーエス SDGsについて

「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)」は、2015年9月の国連サミットで、加盟国193国すべての合意により採択されました。これは経済格差、気候変動など、深刻化する社会課題に向けて、地球上の誰一人取り残さず、すべての人が持続可能な社会の中にあることをめざして設けられた「目標」です。
SDGsでは、貧困や差別、健康、水やエネルギーなど、多岐にわたる17分野の目標が並んでいます。各国が取り組むだけでなく、民間の企業・団体にもその目標にかかわることが期待されています。それぞれの事業や社会貢献活動の中で、できることから行動を起こしたり、見直したりすることで、誰一人取り残さない発展につながります。溪仁会グループが地域に対し、より良い社会を望んで起こすアクションも、今ある問題解決の鍵につながっていく。そう考えてCSR活動を続けていきます。





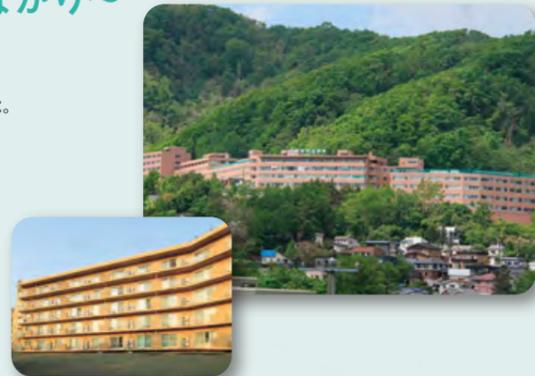
ステークホルダー
ダイアログ

40年、町とともにずっと

～西円山ハーティケアの丘と円山西町のつながり～

1979年6月に札幌西円山病院*が開院して以来、40年にわたり、円山西町地区の皆さんと溪仁会グループの交流が続いてきました。地域の皆さんの温かなサポートやご理解に支えていただき、現在は介護老人福祉施設の西円山敬樹園やケアハウスのカームヒル西円山、グループホーム西円山の丘のあわせて4つの病院と施設が「西円山ハーティケアの丘」として幅広い医療とケアを提供しています。同地区において連携し、協働を図る方々とこの40年の歩みを振り返り、今後めざすべき地域との関係についてお話いただきました。

*開院時の名称は西円山病院、2009年11月に現在の名称に改称



西円山敬樹園
園長
菊地 一朗

札幌西円山病院
経営管理部
部長代理
大植 友樹

社会福祉法人光の森学園
生活介護事業所 霖雨の丘
施設長
上河 真奈美 氏

認可地縁団体
円山西町町内会
監事
田代 馨 氏

認可地縁団体
円山西町町内会
事務局 局長
橋場 光 氏

認可地縁団体
円山西町町内会
会長
矢野 信一 氏

カームヒル西円山
施設長
増田 智子

円山西町で共に暮らす一員として 地域とのつながりを育む

矢野 私は円山西町に住んで55年になります。40年前に札幌西円山病院(当時は西円山病院)ができたときは「何か立派な建物ができたな」という感じで見ていました。35年ほど前に、祖父が病院のお世話になってから、長いお付き合いが始まりました。

田代 私は仕事のつながりがあり、札幌西円山病院がスタートした頃からお世話になっていました。もう80歳を過ぎましたが、働いていた頃の恩返しという意味もあって、地域や病院のお役に立ちたいと考えています。

橋場 町内会活動に携わって16年になります。溪仁会さんとのお付き合いは、施設でのボランティアを町内会が引き受けたことが始まりだったと思います。今では町内会の草刈りや花植えなどに、休みの日にもかかわらず、いつも大勢の職員の方に参加していただいて感謝しています。

上河 霖雨の丘は2015年12月に事業所を開設しました。障がいのある方の通所施設として、レクリエーションやお菓子の製造などを行っています。開設してすぐに、矢野会長に地域の法人や施設に挨拶に連れて行っていただき、その中で溪仁会の方々と顔見知りになりました。

増田 この4月にカームヒル西円山の施設長になったばかりです。老後の生活の場であるケアハウスはまだ知名度が低いので、地域の方に知っていただくのが目標です。職員からは、地域の方とずっと連携したいという声が出ていますので、お仲間としていろいろな活動ができればと思います。

菊地 4年前に西円山敬樹園の園長になったとき、矢野会長がわざわざご挨拶にいられて町内会とのつながりができました。それまで地域との接点はあまりなかったのですが、当施設も地域の一人なのだという意識を持ちました。

大植 私が札幌西円山病院に入職した20年前は、地域とのかわりはほとんどありませんでした。転職になったのが、2012年に地域連携推進室ができたことでした。地域というものを意



識するようになり、翌年から町内会のごみ拾いや「花いっぱい運動」などに参加させていただくようになりました。

菊地 矢野会長に霖雨の丘さんや児童相談所、他法人の病院などをご紹介いただく中で、地域の事業所とのかかわり方や、私たちが地域にどう溶け込み、その一員となるのか、ということを考えるようになりました。そこで、顔の見える関係づくりから始めよう町内会活動に積極的に参加したことで、いろいろな施設が集まり連携が生まれました。

大植 私もごみ拾いや夏祭りなどの町内会活動を通じて各事業所が団結したと感じています。また、町内会の皆さんが気さくに声をかけてくださるので、職員も行事に参加するのを楽しみにしています。時間をかけて積み重ねてきたことが、こういう関係につながったのだと思います。

矢野 溪仁会グループは今では職員数が5,000人近くに上る大きな組織になりましたが、この円山西町が発祥の地なのだという思いを強く持っています。このように医療と介護のサービスがそろっている地域は珍しいのではないのでしょうか。それも札幌西円山病院が40年間ここにあって、地域と良い関係を続けてきてくれたからだと思っています。

町内会との連携で 地域ニーズに応えるサービスを

橋場 最近は独居の高齢者が増えていて、そういう人に何か困ったことがあったとき、どこに相談すればいいのか迷うことがあります。まずは地域包括支援センターに相談するのが基本なのでしょうが、近くにある札幌西円山病院などに相談に乗ってもらえると、もっと安心なのだと思います。

大植 住民の方にはわかりにくいシステムなのですが、行政で決められた役割があるため、相談ごとに対しては私たち単独ではなく、地域包括支援センターやほかの事業所と協力して対応していくというのが今の体制になります。ただ、地域の方々が困ったときに手を差し伸べられるような、相談室のようなものをつくりたいという気持ちは私たちもすごく持っています。

矢野 これだけの医療と介護のサービスがそろっているのに、直接相談できないのが今の制度なのですが、そういうことは住民にはわからないと思います。そこをなんとかスムーズに対応してもらえないか、という願いがあるのですが。



増田 私はここに来る前は地域包括支援センターにいました。気がかりなことは遠慮なく地域包括支援センターに相談していただくと、上手に対応してくれると思います。どこに相談したらいいのかわからないというときは、私たちに言っていただければ、うまく連携を図れるようにお手伝いします。

田代 風邪をひいたり、転んだりしたときに、札幌西円山病院に行っているのだからと迷う住民も多いと思います。

大植 2017年10月から地域の方のために「生活習慣病・高齢者総合外来」を開きました。また、矢野会長から「ここまで歩いてくるのは大変」というご意見をいただき、昨年からは円山西町町内会の方を対象に無料送迎も始めました。地域で暮らす方々に、何かあったときに受診できる、相談できるという安心感を提供したいという思いで取り組んでいます。

田代 そうしたことを知らない住民が多いのは、町内会のPR不足。私たちがもっと周知していく必要がありますね。



矢野 昨年からは町内会と札幌西円山病院の共催で「にしまるリハビリ健診」という講座も始めました。高齢者の健康づくりを専門的な医療スタッフの方が支援してくれるという、とても素晴らしい取り組みだと思っています。

菊地 西円山敬樹園とカムビル西円山、グループホーム西円山の丘の3施設でも、2014年から「なるほど身になる福祉講座」を町内会と共催しています。溪仁会グループの病院や施設の見学会、介護予防や健康づくり講座などを行うことで、住民の方と交流させていただく機会にもなっています。

上河 私たちは溪仁会さんの取り組みをまねて、町内会活動に参加させていただいています。職員の皆さんが地域に溶け込んでいるのを見て、うちのスタッフがとても感動していました。今年は菊地園長に声をかけてもらい、敬樹園の夏祭りにも参加させていただきました。また月に1回、敬樹園の喫茶室で「りんごカフェ」を開いています。障がいのある人は地域とのかかわりがなかなか持てないので、そういう機会をいただけるのはとても貴重なことだと感謝しています。

地域とのネットワークを築き 共生型社会をめざしていく

矢野 今回のような集まりは地域包括ケアシステムの実現につながるのだと思います。私は地域包括支援センターだけに依存したネットワークづくりでは限界があるのではないかと考えています。

増田 私の経験から、町内会とさまざまな事業所を結びつけて、細かい網の目のようなネットワークを築くことで、より多くの方を地域で支援していくことができると感じています。円山西町町内会は事業所との連携がとてもうまくできているので、自主的な地域づくりも可能だと思います。

大植 円山西町オリジナルのネットワークをつくっていったもよいということですね。

上河 先ほど、どこに聞いたらいいのかわからないという話がありました。そうした悩みを解消するために、こういう座談会が地域でもできるようになればいいなと感じました。お茶会のような場であれば、気軽に話ができるのではないのでしょうか。数カ月に1回、地域の事業所や法人、商店の方も交えてお話をする場を持てればと思います。

菊地 実は今、当施設の相談課の職員たちと町内会、地域にある法人、商店街を結びつけるネットワークづくりができないだろうか考えています。まだ計画を立てたところなのですが、これから皆さんにもご相談をさせていただきたいと思っています。ちょうど上河施設長から心強いお話がいただけて、とても勇気づけられました。

田代 より多くの地域の皆さんが、年齢に関係なく、いろいろな意見を持ち合えるような会にしたら素晴らしいと思いますね。札



幌西円山病院では高齢者向けの教室を開催されていますが、そうした場での交流はどのようなのですか。

大植 認知症カフェ（スマイルカフェ）や医療公開講座なども開催しています。これらの取り組みでも一定の効果は出ていますが、さらに今出ているような茶話会的な場であれば聞けるような内容もたくさんあるのかなと思います。

橋場 私は高齢者サロンの代表もしていて、小さなサロンが地域にたくさんできるといいと思っています。サロンでは食事を提供しているのですが、それによって支援の必要な人がどれくらいいらっしゃるのかを把握できるのです。昨年の北海道胆振東部地震では、そのネットワークを使い、サロンで炊き出しをして食事を配ったところ、すごく喜ばれました。

上河 そういうサロンなら、地域の方が話を聞いてもらおうかなと思える場になりますね。

矢野 私は町内会の役割として、地域の病院や施設に横串を通すこと、つまりそれぞれをつなぐ活動を心がけてきました。今はそれが非常にうまくいっているのではないかと思います。

増田 そうですね。この地域には高齢者施設と障がい者施設がありますし、地域には学校もあってお子さんもたくさんいます。ここに異動してきたとき、多様な人が共に暮らすのを当たり前のことと捉えている地域だと感じました。これからはそうした共生型社会という視点が大切になります。地域のお店などにも協力してもらって、若い人が関心を持つような共生型カフェやイベントもしてみたいと考えています。これだけの協力があれば何かができるはずだと思います。

上河 障がい者の雇用のことも、矢野会長がとても熱心に考えてくださっています。障がい者が地域に自然に受け入れられ、働くことができる環境をめざして、ネットワークの力を借りなが



ら、できることを積み重ねていきたいと思っています。

田代 私自身、認知症が心配でし、町内会でも悩んでいる人はいると思います。そういう相談をしたり、診察をしてもらいやすくなるような取り組みがあるといいなと思います。認知症カフェや医療公開講座もやっていただけていますが、潜在的なニーズはもっとあるはずですよ。

橋場 私も同じ気持ちです。ちょっとしたことをきっかけに、認知症や病気が進むケースがあります。高齢になるとみんなそういう不安な気持ちを持っているので、そこをフォローしてもらえるシステムがあると安心できると思います。

大植 今までではどうやったら病院を利用していただけるかということを考えていましたが、これからはこちらから向かっていく時代になると思います。そうしたニーズに応えることも私たちの役割だと考えています。また、初心を忘れないためにも、こういうつながりのきっかけになった町内会活動は、これからも大切にしていきたいと思っています。

菊地 さまざまな法人や施設、地域の方と一緒に、垣根を越えて具体的なアクションを起こしていきたいと思っています。そのためにはネットワークをいかに増やし、地域のニーズをどう把握するのかということを考える必要があります。ずっと住み続けられる地域づくりを実現したいと思っていますので、よろしく願います。

矢野 皆さんが良い関係を築いてくれることで、円山西町の地域包括ケアシステムは出来上がっていくと考えています。そのことを期待していますし、これからも協力を続けていきたいと思っています。今日は普段はできないような話をする機会になりました。ありがとうございました。

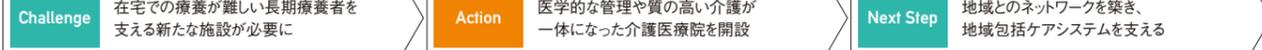
※本ダイアログは2019年7月18日に西円山敬樹園において開催しました

誰もが住み慣れた地域で暮らし続けるために

高齢になっても住み慣れた地域で、その人らしい生活が続けられる社会をめざそうという地域包括ケアシステム。溪仁会グループはその実現に向けた取り組みを推進しています。

質の高い医療と介護で生活を支える 介護医療院「にしまるポッケ」

[札幌西円山病院 介護医療院]



札幌で初となる介護医療院を開設

介護療養病床の廃止に伴い、慢性期の医療や介護のニーズに対応するための新たな枠組みとして創設されたのが介護医療院です。札幌西円山病院 介護医療院は札幌西円山病院の併設施設として、2018年7月1日に開設しました。当時は全国的に見ても介護医療院の開設はまだ少なく、北海道で2番目、札幌市では初のことでした。

札幌西円山病院で慢性期医療に携わってきた河井裕施設長は、「退院することになって、ご自宅には戻れず、施設でも受け入れが難しいという患者さんがいらっしやるのを見してきました。介護医療院であればそうした方を受け入れ、適切なケアが提供できること、それによって社会ニーズにも応えられることから、院内で介護医療院の開設に向けた気運が高まりました」と振り返ります。

まだなじみの薄い介護医療院に親しみを覚えてもらえるように、「にしまるポッケ」という愛称をつけました。「ポッケ」とはアイヌ語で「あたたかい」という意味。利用者さんにとって温かな家のように、という思いが込められています。

当たり前の生活を前提にしたケアを大切に

介護医療院は病院とは異なり、日常生活を支援するためのケアやリハビリテーションが中心になります。にしまるポッケは札幌西円山



医師や看護師、介護スタッフなどが連携し、細やかなケアを提供しています

病院から異動したスタッフが、開設前には同じ溪仁会グループの介護老人福祉施設を見学して、高齢者ケアに対する心構えなどを学びました。

開設してみると、医療と介護で生活を支える「にしまるポッケ」は生活の場でありながら、病状が安定しない利用者さんが多く、介護医療院とはどんな施設なのか迷うことも多々ありました。しかし、そのような中でもスタッフは「もっとレクリエーションなどを提供して、生活の場としての楽しさを感じていただけるようにしたい」と日々工夫を重ねてきました。また、ご家族が病院と同じような医療サービスを希望される場合もあり、介護医療院の役割や目的を丁寧に説明してご理解いただく必要がありました。

「介護・看護スタッフが中心となって試行錯誤を続ける中、リハビリテーションスタッフも、生活支援に重きを置いたりリハビリテーションを実施するなど工夫してくれ、寝たきりだった方が起き上がれるようになったり、覚醒する時間が長くなったり、中には話ができるようになった方もいました。利用者さんの変化に感動するご家族の姿を見て、多職種で行う“当たり前の生活”を前提にしたケアの大切さをあらためて実感しました」と國生真希師長は語ります。

その方の思いや生き方を尊重したサポートを

同施設ではご家族を交えたカンファレンスを重視し、ケアマネジャーが要望をくみ取りながらケアプランを作成しています。ご家族から感謝の言葉をいただくことも多く、細やかなケアが評価されています。また、医師が常駐していることで、病状の変化に迅速に対応できるのも強みの一つです。利用者さんの基本的な身体データや画像データをそろえておくことで、医療機関への転院もスムーズにできるように備えています。

今後の課題としているのが地域とのネットワークづくりです。町内会や高校生ボランティアとの連携などを通して、多くの方に介護医療院について知っていただく活動を展開する予定です。また、介護



施設長
河井 裕

看護部 師長
國生 真希

医療院の役割の一つに挙げられる看取りも、今後取り組むべきテーマになっています。河井施設長は「当施設では終末期の対応について、利用者さんやご家族の意思を事前に確認しています。それぞれの思いを尊重し、要望があれば安心して当施設で最期を迎えていただける体制を整えています」と話します。

開設から1年が過ぎ、めざすべき姿が少しずつ見えてきました。「今年からご家族を交えたケアの学習会を始めました。今後は地域の方に向けても介護や終末期について一緒に学ぶ機会をつくっていききたい」と國生師長。河井施設長は「退院支援にも積極的に取り組み、地域包括ケアシステムの中で求められる役割を果たしたい」と目標を語ります。

医療に裏打ちされたケアと生活に視点を置いた温かな環境で、高齢者を支える「にしまるポッケ」。新たな医療と介護のかたちを地域と共に考えていきます。

介護医療院とは

2018年4月に法定化された新施設。長期療養が難しく、医学的なケアを中心とする医療療養病床の対象にはならない方に、専門的な介護サービスや医療を提供し、生命と生活を支えます。医療施設の機能と生活施設の機能を併せ持ち、生活の場としての「居宅施設」に位置づけられています。

自宅のように過ごすことができる個室



季節のレクリエーションも楽しみの一つになっています

人生のステージを支える溪仁会グループの活動

開設20周年の記念イベントを開催

[コミュニティホーム八雲]

コミュニティホーム八雲は1998年4月の開設以来、地域に密着した介護サービスを提供してきました。2018年4月28日に開設20周年を記念して、記念式典・祝賀会が開催されました。向幸恵施設長は開会の挨拶の中で20年の歩みを振り返り、地域の方々に感謝を述べるとともに、「職員たちと一緒に、安心・安全で質の高い介護をめざしていきたい」と話し、これからも地域から信頼され必要とされる施設づくりに向けて努力していくことを約束しました。



訪問看護サービスの拠点がオープン

[訪問看護ステーションそうえん]

2018年8月1日に、札幌溪仁会リハビリテーション病院の在宅部門として「訪問看護ステーションそうえん」を開設しました。訪問地域は札幌市中央区と西区・北区の一部。同病院のほか、地域の病院やケアマネジャーの方々と連携し、患者さんが安心してご自宅での生活を送ることができるように、看護師やリハビリテーションスタッフがサポートしています。薬や注射などの医療面の管理、日常生活支援のほか、体調の見守りやターミナルケアまで、さまざまなニーズに柔軟に対応しながら、温かみのあるサービスの提供をめざしています。

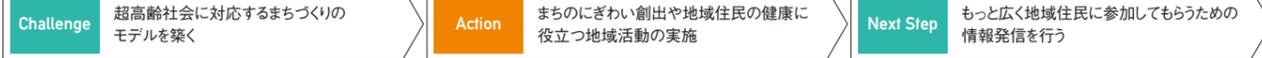


地域との接点を増やし顔の見える関係を築く

病院や施設は医療、保健、福祉サービスを提供するためだけに存在するのではなく、地域の一員でもあります。各施設が地域の一部として、また職員一人ひとりが地域の一員として、住民の方々にとって身近な存在となることをめざしています。

地域活動を通して、暮らしやすいまちづくりにも参画

[札幌溪仁会リハビリテーション病院]



病院の内外で地域と交流を深める活動を実施

札幌溪仁会リハビリテーション病院は、誰もが住み慣れた場所で安心して暮らし続けられる地域づくりをめざして開院しました。回復期を担う病院として、患者さんや障がいのある方に質の高いリハビリテーション医療を提供することに加えて、さまざまな地域活動を通して暮らしやすいまちの在り方を考え続けています。

その活動は、病院が主催して地域に向けたさまざまな催しを実施するだけでなく、地域のイベントへの会場提供や開催協力、また

は病院外で開催される地域の祭りやイベントへの職員の参加など、活動は多岐にわたっています。桑園地区の交流促進を図る団体「桑園交流ネットワーク」と、地域住民の健康意識を高め交流の機会をつくる「そうえん健康茶話会」を継続開催するなど、地域の団体とのコラボレーションも進み、関係を深めています。

今後も同病院では、地域の交流やにぎわいを生み出す“場”となり、地域の一員として関係を築いていくための活動を続けていく予定です。

REPORT ① | 病院を地域に向けて開く活動

溪リハ お元気セミナー

地域住民の健康維持をサポートするための講座として、病院1階のラウンジを開放して行う「溪リハ お元気セミナー」を2018年7月8日から開始しました。第1回は「転ばぬ先の準備と体操」をテーマに、横串算敏院長の講演と、理学療法士による病院独自の「まるべりい体操」とロコトレ(ロコモーショントレーニング)を行いました。

9月2日の第2回は歯科衛生士と言語聴覚士による講義を行ったほか、セミナー後には院内見学ツアーを実施。1階外来と2階リハビリテーション室で、リハビリ機器を体験していただく機会を設けました。



※写真は2019年7月7日の開催の様子

開院1周年記念ロビーコンサートを開催

同病院は2018年6月に開院1周年を迎えたことから、6月16日にこれを記念したロビーコンサートを開催しました。横串院長から1年を振り返ったの挨拶の後、札幌大学吹奏楽部の皆さんによる演奏が披露されました。曲の合い間には団員が使用する楽器についてのトークもあり、ご参加いただいた入院患者さんやご家族、地域の方々と共に楽しいひとときを過ごしました。



流行の曲からなじみの童謡・演歌まで幅広いレパートリーが披露されました

最後に横串院長から、札幌大学吹奏楽部の皆さんに感謝状を贈呈しました



REPORT ② | 病院の外に出での活動

桑園地区福まち研修会に参加

地区福祉のまち推進センター(福まち)は、市民が自主的な福祉活動を行うために、札幌市の地区社会福祉協議会ごとに設置されている組織です。

2019年3月15日に行われた桑園地区福まち研修会に職員が参加し、転倒リスクをスクリーニングする「歩行年齢チェック」や、運動指導を行いました。歩行年齢チェックでは、参加者全員が実年齢より若いとの判定結果が出て、会場は大いに盛り上がりました。



歩行年齢チェックの後は、いすを用いた自宅でもできる簡単な運動をレクチャーしました

簡単な体力測定と年齢、身長・体重などのデータを組み合わせて、何歳くらいの歩き方をしているかという目安を判定しました



地域と交流を深めるための溪仁会グループの活動

自治体と共催で難病研修会を実施

[定山溪病院]

2018年10月30日、定山溪病院は札幌市南区健康・子ども課と共催の難病研修会を、南区民センター区民ホールで開催しました。2回目の開催となる今回は「医師とリハビリスタッフに聞くパーキンソン病との上手な付き合い方」をテーマに、松本昭久神経難病センター長が講演。患者さんやご家族、保健・医療福祉関係者など52名が参加しました。



そらぶちキッズキャンプに参加

[医療法人稲生会]

滝川市の「そらぶちキッズキャンプ」は、難病とたたかう子どもたちがキャンプを楽しめるよう、医療施設を完備したキャンプ場です。2018年4月28日・29日の2日間、医療法人稲生会は、患者さんご家族18名とスタッフ7名で、同施設でグループキャンプを実施。小児患者さんは乗馬やツリーハウス、たご揚げなどを体験しました。



小学生に歯の健康を伝える

[定山溪病院]

2018年11月6日、定山溪病院の歯科では、定山溪小学校の5・6年生17名の見学を受け入れました。同小学校が実施する歯の健康を学ぶための総合学習の一環として行われたもので、参加児童は久米麻也子歯科診療部長から歯の健康の大切さや歯科の役割についての講義を受けた後、病棟で歯科衛生士による患者さんの口腔ケアを見学しました。



ボランティアによるロビーコンサート

[手稲溪仁会病院]

手稲溪仁会病院のボランティア「青い鳥」は、1998年に発足し2018年10月に20周年を迎えました。これを記念して、11月10日に同病院A棟1階総合受付前でロビーコンサートを開催しました。指揮者と伴奏者を置き、ボランティアの皆さん36名が参加して、手話を交えての合唱などを披露。患者さんやご家族80名がその歌声を楽しみました。

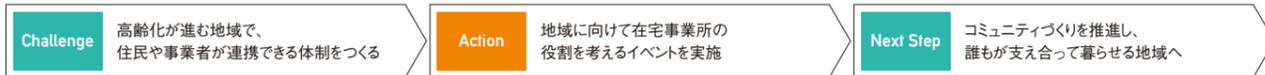


地域の皆さんを結びながら共に生きる

浜仁会グループは地域で暮らすさまざまな人や組織をつなぐ活動に取り組み、互いに支え合う社会の実現をめざしています。

在宅事業所と地域とのかかわりを考える「地域と共にずーっと」を開催

[青葉ハーティケアセンター]



高齢化が進む地域で未来を考えるきっかけづくりを

地域の高齢化は札幌のような大都市圏でも進んでいます。特に高齢化率の高い地域の一つが、厚別区の青葉地区です。高齢者の夫婦・単身世帯が4割にも及ぶ同地区では、高齢の方が安心して地域や自宅で暮らし続けるための、多様で柔軟な支援が求められるようになっていきます。青葉ハーティケアセンターは2003年の開設以来、同地区において在宅生活を支援する幅広いサービスを提供。2016年には小規模多機能型居宅介護あおばを開設し、宿泊にも対応しています。

同センターでは、小規模多機能型居宅介護あおばの開設2周年に合わせ、2018年10月5日に地域が抱える高齢者福祉の課題や今後の在宅事業所の在り方などを考える企画として「青葉ハーティケアセンター 地域と共にずーっと」を開催。ハーティケアセンターを統括する社会福祉法人浜仁会の細田高センター長は「これからは住民の方や介護保険サービス事業者が一緒になって、安心できる地域とは何かを考え、支え合う仕組みが必要な時代。そのためのきっかけづくり、広く地域の方々との連携を図るために、今回のイベントを企画しました」と開催の目的を説明します。

地域をつなぎ、安心して暮らせる社会を築くために

第1部では、江別市で高齢者と障がいのあるお子さんが一緒に過ごす共生型デイサービスを運営する株式会社ライズリング代表



地域共生社会をめざす渡邊譲氏の講演に、職員たちも大きな刺激を受けています

取締役の渡邊譲氏を講師に迎え、「地域と共に歩む事業所とは」をテーマにお話しいただきました。続く第2部のシンポジウムでは、「青葉地区における在宅事業所の役割」と題して、シンポジストの方々に高齢者を支える地域活動の実例や多様化する生活支援ニーズの現状、地域における在宅事業所への期待などについて意見を交わしていただきました。



社会福祉法人浜仁会
浜仁会ハーティケア
センター長
細田 高

当日は同センターの職員、地域の介護保険サービス事業者、地域住民の皆さんを合わせて約50名の参加がありました。シンポジウムの後に行われた質疑応答では、「地域にある福祉事業所やサービスのことを知らない人が多い。もっと情報を発信してほしい」といった意見が出されました。また、参加者へのアンケートでは「青葉地区は福祉のネットワークがしっかりしていることを知り安心した」「住み慣れた場所で最期まで生活するための心構えができた」など、高齢になっても地域で暮らし続けることに前向きな意見が多く見られました。

細田センター長は「私たち在宅事業者は同じ地域の一員であり、困ったときに頼れる存在が身近にあることを知っていただく機会になったのでは」と振り返ります。



青葉ハーティケアセンター



シンポジウムでは、小規模多機能型居宅介護あおばの運営推進会議の構成員の方にシンポジストを務めていただきました

地域を支える存在として多様な視点からのサービスを

イベント後、職員の考え方も変わり始めました。同センターには4つの事業所(指定居宅介護支援事業所、デイサービスセンター、訪問看護ステーション、小規模多機能型居宅介護)があり、それぞれの機能に沿った活動を展開してきましたが、これからは4事業所が一体となって連携し、地域のためにワンストップで質の高いサービスを提供しよう、という意識が高まっています。

「まだ元気な高齢の方や要支援の方に健康づくりの大切さを理解してもらい、介護予防を推進するための働きかけをしていきたい。さらに、今後は障がいのあるお子さんの支援サービスに取り組み、地域のさまざまな人たちが集えるような場所づくりもしていきたい。できること、挑戦してみたいことはたくさんあります。地域の人たちをつなぎ、新たな交流を生み出すための仕掛けをこれからも考えていきます」と共生型社会の実現に向けたビジョンを語る細田センター長。地域の福祉サービスを担う拠点として、将来を見据えた活動が続いていきます。

担当者の声

新たなサービスを考える刺激を受けました

小規模多機能型居宅介護あおば
所長
漆坂 司



今回のイベントでは外部の方の考えやご意見を聞くことができ、たいへん参考になりました。特に、共生型サービスに取り組む渡邊さんの講演は、参考にすべきことが多く、とてもいい刺激を受けました。職員にとって、自分たちができることを考えたり、サービスの質を見つめ直す機会になったのではないかと思います。イベントでの学びをもとに、小規模多機能型居宅介護だからこそできる、地域ニーズに柔軟に応えられるサービスを提供したいと考えています。



小規模多機能型居宅介護あおばは通いや訪問、宿泊サービスで、365日24時間にわたり地域の方の生活を支えています

人や地域をつなぐ浜仁会グループの活動

地域の交流を図る医療&福祉イベントを実施 [札幌浜仁会リハビリテーション病院]

2018年7月14日、北海道理学療法士会札幌支部主催による「さっぽろ医療&福祉フェスタ2018」が開催されました。会場となった札幌浜仁会リハビリテーション病院では、福祉用具の紹介や健康相談などのほか、障がいのあるお子さんのご家族による「Happiness market」も行われ、地域で暮らす多様な方々が情報交換や交流を図る場となりました。



チャリティー自販機を設置 [医療法人浜仁会・手稲浜仁会病院]

医療法人浜仁会は2018年8月より、手稲浜仁会病院は同年11月より、「日本財団チャリティー自販機」を設置しました。飲料が1本購入されるごとに10円が寄付される仕組みで、集まった寄付金は、医療法人浜仁会の分が「災害復興支援特別基金」に、手稲浜仁会病院の分は「難病児と家族支援」と「子どもの貧困対策支援」の活動費用にそれぞれ充てられます。



法人開設5周年記念パーティーを開催 [医療法人稲生会]

2018年11月3日、医療法人稲生会の法人開設5周年記念パーティーが開催され、250名以上の方にご参加いただきました。第1部は「『困難を抱える人々とともに、よりよき社会をつくる』～私たちが目指すべき、よりよき社会とは?～」をテーマにシンポジウムを実施。第2部では患者さんやご家族による絵本朗読や合唱、演劇などが行われ、楽しく交流を深めました。



子どもの在宅ケアを知ってもらう機会に [手稲浜仁会病院]

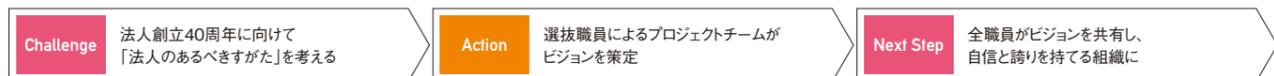
手稲浜仁会病院は2018年11月17日に第15回子ども在宅ケアネットワークを開催しました。難民や貧困などの取材に携わるフォトジャーナリストの安田菜津紀さんによる講演や、在宅で人工呼吸器を使用している方をパネルディスカッションを実施。参加者からは「ニュースでは報じられない人たちの姿を知り視野が広がった」という感想が寄せられました。





職員が夢を持って働くことのできる組織へ 未来に続く法人像を描く「夢プロジェクト」

社会福祉法人溪仁会は、職員の思いを組織運営に活かす取り組みを行っています。
職員自ら組織の未来を考え、その実現に向けて行動することで、より意欲的に働くことのできる環境づくりをめざしています。



職員が自信と誇りを持って働くために

社会福祉法人溪仁会は5年ごとに中期経営計画を定めています。2017年に発表された第2期中期経営計画「ビジョン福祉40」では、法人創設40周年を迎える2021年に向けてどのような社会福祉法人像をめざすのか、職員一人ひとりが自信と誇りを持つことができる組織風土や仕組みをつくるためにはどのような施策が必要かという内容が中核に据えられました。それらを検討し、次期のビジョンに職員の思いを反映するために立ち上げられたのが「夢プロジェクト」です。

同プロジェクトは、各施設から選抜された中堅の役職者に、40周年に向けて法人のあるべきすがたを考えてもらい、「夢をカタチに」するための取り組みです。社会福祉士や介護福祉士、看護師、作業療法士、管理栄養士などの多職種で構成された12名が、4年間をかけて幅広いテーマを話し合い、提言としてまとめることをめざしています。職場や職種の異なるメンバーが参加することについて、同プロジェクトの事務局を担当する工藤典幸企画担当課長は「それぞれの現場が抱える課題を共有し、解決に向けて話し合うことで、事業所間の連携にもつながるのでは」と期待しています。

3つのチームが課題を検討し、ビジョンを描く

同プロジェクトの会議は全部で21回。それぞれの事業所の課題を持ち寄り、グループワーク形式で話し合う作業から始まり、現在はその中で抽出された課題を「人財の在り方」「経営・業務の在り方」



プロジェクトメンバーは所属施設や職種、経験年数の異なる職員で構成されています

「事業の在り方」の3つのカテゴリーに分け、検討チームをつくって討議を進めています。その後、2020年12月までに中間のまとめを行い、法人内の意見なども参考にしながら修正。2021年12月に最終的な提言を発表する予定です。

会議では、課題を話し合うだけでなく、一般企業での職場体験や他法人の施設見学を行うなど、ユニークな企画を取り入れています。

そうした活動について工藤課長は「さまざまな企業や法人の取り組みを見てもらうことで、新たな気づきや仕事のヒントがあるはず。介護の世界の常識にとらわれず、広い視野で考えてもらうのが狙いです」と話します。

会議を重ねる中で、メンバーも積極的に意見を述べるようになり、主体的に取り組む姿が見られるようになりました。また、意見を交わすことで互いの職場や職種の理解につながり、コミュニケーションを深める効果も生まれています。

未来に向けて発展する組織をめざして

事務局では多くの職員に同プロジェクトを知ってもらい、参加意識を高めることも目標としています。会議を施設での持ち回り開催にするなど、組織全体に浸透させるための工夫も行っていきます。

「利用者さんのために、地域のために、という思いはみんな同じ。そういう職員の希望や熱意をくみ取り、組織運営に活かしていきたい」と工藤課長。福祉の現場を担う職員の思いを大切にしながら、未来を見据えたビジョンを共に考え、新たな社会福祉法人像を描いていきたいと考えています。



人財の在り方、経営・業務の在り方、事業の在り方についてチームに分かれ検討しています



社会福祉法人溪仁会
経営管理部 財務課
企画担当課長
工藤 典幸

夢プロジェクト メンバーの声

魅力ある人財育成を考えることで 誰もが意欲的に働き続けられる環境を

夢プロジェクトが始まった当初は、多職種とかかわることで自分自身が成長できるのでは、という期待があった半面、組織の将来ビジョンを考えるという作業に戸惑いを感じたこともありましたが、会議を重ねる中でプロジェクトの目的や意義を深く理解できるようになりました。また、他の施設の職員やさまざまな職種との話し合いを通じて連携や共感が生まれ、より積極的にプロジェクトにかかわろうという意識が強くなりました。

現在は「人財の在り方」検討チームのリーダーを務めています。福祉施設にとって、若い職員の定着は最大の課題です。当チームでは人財育成と離職防止を主なテーマに、若い職員を育てるためには何が必要か、働く人にとって魅力ある法人像とはどのようなものか、といったことを、現場の声も取り入れながら検討しています。溪仁会グループのスケールを活かしたキャリア支援や人事交流も視野

コミュニティホーム白石
施設ケア部看護課 課長代理
波多野 なつみ



に、やりがいを持って働くことができる環境をめざしています。
課題の解決に向けて多様な考え方を持つ人たちと協力できるのが、本プロジェクトの魅力です。メンバーと共に、意欲のある人が働き続けられる組織の在り方を考えていきたいと思っています。



夢プロジェクトでの学びや経験が施設での看護に活かされています

持続的な発展をとげる 組織であるために 社会福祉法人溪仁会 理事長 谷内好



日本の社会構造が変化する中、社会福祉法人を取り巻く環境も大きく変わろうとしています。夢プロジェクトでは当法人の現状を理解し、法人創設40周年となる2021年以降はどのような方向をめざすべきかということを検討してもらっています。会議の場で多くのメンバーと意見を交わし、情報収集や自己研鑽を図ることで、当法人がすべきことに気づき、未来に向けた提言をしてほしいと考えています。

今年度は同プロジェクトの折り返し地点になります。これまでは課題を持ち寄り、話し合いを進める中で取り組むべきテーマを抽出する「インプット」の期間でした。これからは3つの検討チームがそれぞれのビジョンをまとめ、具体的な施策を示す「アウトプット」の作業に入ります。この検討作業には、法人本部の職員もオブザーバーとして参加しており、本部と施設間の情報共有や意見交換を行う上でも大切な役

割を果たしています。

今後は検討チームの提案を中間報告として公表し、法人内からパブリックコメントを寄せてもらうことで、多様な意見を取り入れる考えです。それによって同プロジェクトの進捗状況を広く伝えると同時に、各施設のマネジメント層が施設運営の在り方を見直す機会にもなると思います。

プロジェクトメンバーは4年間にわたる活動を通して、社会福祉法人の職員として、また一人の人間として、成長することになります。当法人の将来を担うリーダーとして、組織を変える力を培ってくださることを期待しています。

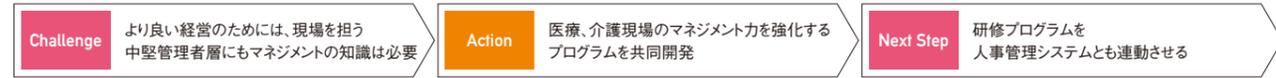
今後、日本の人口はさらに減少を続け、少子高齢化が一層進行すると予測されています。5年後、10年後の未来は、社会福祉法人にとって、どのような時代になっているのか。日本型雇用の概念が変わりつつある今、少し先の未来も想定しながら、時代に合ったダイバーシティな雇用形態と介護福祉サービスの在り方を考えていく必要があります。プロジェクトメンバーには、幅広い視野をもって課題を検討し、新たな法人像を創造してほしいと考えています。

※溪仁会グループでは人材を宝ととらえ、「人財」と表記しています。

組織の成長を支える人財を育てる

溪仁会グループでは、体系的な教育研修システムを中心に、医療人・福祉人としてだけでなく組織人としてのスキルを持った人財育成に取り組んでいます。

マネジメント力を養成した医療・福祉の人財を現場へ輩出 [溪仁会グループ]



「組織人」としての力を養う体系的な研修

溪仁会グループでは、秋野豊明名誉会長(当時理事長)のもと、「医療人・福祉人」「組織人」「職業人」の育成の中での「組織人」として求められるスキルや、医療・福祉の質向上と経営の質向上を図るため、マネジメントの知識を習得することを目的として2006年より本部主催研修会をスタートしました。2015年からは田中繁道理事長へと引き継がれ、現在「独創性」「一体感」「客観性」の3つの柱を軸として本部主催研修会の更なる充実に取り組んでいます。特に「組織人」として求められるスキルや医療・福祉の質の向上、経営の質の向上の連鎖を図るためマネジメントの知識を習得することに重点を置いています。

「階層別(勤続年数・役職など)、年代別、テーマ別ごとに、体系的に組み立てていることが特徴です。2018年度まで延べ21,562人の職員が受講しています」と医療法人溪仁会法人本部総務人事課の柳沢容子課長補佐は話します。

産学連携でマネジメント力を養う 研修プログラムを共同開発

2015年から、現場の組織マネジメントを担う中間管理者層の育成を目的に、小樽商科大学ビジネス創造センターなどと協働して、研修プログラムの共同開発に取り組みました。これは同大学の「医学経営人材育成事業」が経済産業省の事業に採択されたことによるもので、3か年かけて専門的・実践的なプログラムの内容をつくり上げ、受講生からのフィードバックも得ることができました。

2018年度以降も実施の必要性を感じ、溪仁会グループ単独の研修プログラム「経営マネジメント力養成研修会」として継続しています。

第一期生として13名がプログラムを修了しました。

この研修では知識やスキルを学ぶだけでなく、グループワークでのディス



カッションを通して「多様な視点から考える力」を養います。また、組織横断的な研修であるため情報交換・交流の場としても機能しています。



医療法人溪仁会 法人本部
総務人事課 総務人事課
課長補佐 研修担当
柳沢容子

アクティブラーニング方式の導入

さらに、アクティブラーニング方式を取り入れたことも特徴です。受講者は研修時に現場での実行計画を立て、実際に自分の所属部署に持ち帰ってそれを実施し、次回研修で計画実施の振り返りを行います。

2019年度からは将来を担うリーダー層へもマネジメント力を養うプログラムを実施していくこととなりました。アクティブラーニング方式を取り入れ、また人事管理システムと連動させた研修へと発展させていくことを計画しています。

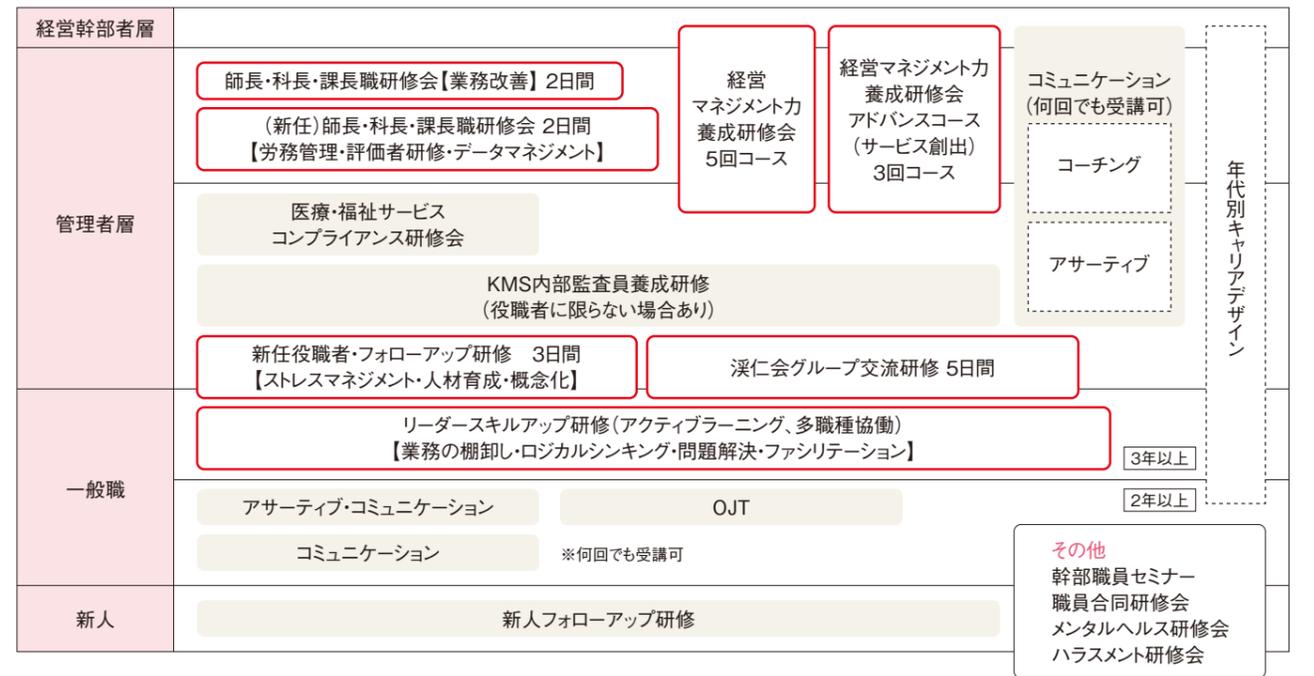
現場との連携で研修の動機づけ強化へ

研修の効果をどう評価するかは、マネジメント研修に限らず常に課題となっています。「今後は現場の上司の方々とも協働し、研修を受けた職員の皆さんを現場でフォローできる体制を築きたいです」と柳沢課長補佐。「研修は、一時現場での役割を離れて自分のキャリアや成長を考える場です。新しい知識や人脈を得て、自分と向き合う時間をつくることで、生き生きと、元気になって各現場に戻ってほしいです」と思いを語りました。約13年間の研修の積み上げによる「学習する組織」を、柔軟に進化させることをめざしています。

経営マネジメント力養成研修会 受講者の声

- 戦略策定や分析の理解が深められた。
- 普段は経営担当者として経営分析をしているが、ほかの職種の皆さんと分析することで新たな気づきを得られた。
- 人事評価は難しいことが多いが、視点をあらためて学べた。
- 「ブランド」という言葉の認識が変わった。

2019年度溪仁会グループ職員研修会体系図



組織・チーム力を強化する溪仁会グループの活動

KMS内部監査員養成基礎研修会を開催 [溪仁会グループ]

溪仁会グループでは質の高いサービスを提供し続けるために、独自のマネジメントシステム「KMS(溪仁会マネジメントシステム)」に基づいて職員同士が内部監査を実施し、業務手順などを確認しています。2018年6月21日・22日に内部監査員を育成する「KMS内部監査員養成基礎研修会」を実施しました。合計47名の職員が参加し、内部監査の手法などを学びました。



サイバー攻撃の脅威と現状についての勉強会 [溪仁会グループ]

2018年10月17日、北海道警察本部サイバー攻撃特別捜査隊・札幌方面手稲警察署から講師を招き、サイバー攻撃等のリスクについての勉強会を開催しました。溪仁会グループの情報システム担当者18名が参加し知識を習得したほか、警察との協力体制を整える機会となりました。



JSA審査登録交流会に参加 [溪仁会グループ]

溪仁会グループKMS推進事務局(医療法人溪仁会法人本部)は、2018年11月2日に行われた日本規格協会(JSA)審査登録交流会にグループを代表して参加し、溪仁会グループの経営体制やKMSの概要および将来展望、内部監査制度を事例発表しました。



臨床倫理研修会を実施 [手稲溪仁会病院]

2018年11月29日、日本臨床倫理学会理事の箕岡真子先生を招き「終末期医療倫理の基礎とDNARの倫理～アドバンスケアプランニングの重要性～」と題した研修会を開催。医師・看護師・社会福祉士など多職種の計76名が参加しました。



ブランド力を構築し、地域の信頼を高める

溪仁会グループの活動が外部に知られ評価されることは、地域からの信頼向上につながります。北海道・日本・世界をリードすることで溪仁会ブランドを築き、高めていくことをめざします。

海外看護師に日本の医療を現場で学ぶ機会を提供 [手稲溪仁会病院]

SAKRA World Hospitalはインド南部・バンガロール市にある総合病院です。2018年5月21日から6月1日に同病院で集中治療部門看護師長を務める看護師2名が、日本の医療現場を見学する実地研修を、手稲溪仁会病院で行いました。ICUを中心に、集中治療看護や医療安全、チーム医療などについて研修を行いました。参加した2名からは「インドでも年間を通じた教育計画やICUプロジェクトを多職種で展開したい」「5S(整理・整頓・清掃・清潔・習慣)活動はすぐに活かしたい」との感想が寄せられました。



海外医療関係者の視察を受け入れ [溪仁会グループ]

2019年2月18日から20日にかけて、タイ国の「高齢者のための地域包括ケアサービス開発」プロジェクトチームが来訪。手稲溪仁会病院・札幌溪仁会リハビリテーション病院・札幌西円山病院を回り、地域社会に根ざしたリハビリテーションに関する研修を受講しました。3月26日から28日には、韓国慢性期医療協会所属の31名の医療関係者が来訪し、定山溪病院、札幌溪仁会リハビリテーション病院、札幌西円山病院を見学しました。



タイ国「高齢者のための地域包括ケアサービス開発」プロジェクトチーム



韓国慢性期医療協会の見学の様子

第69回日本病院学会の学会長を務める [溪仁会グループ]

一般社団法人日本病院会が主催する、第69回日本病院学会の北海道開催にあたり、溪仁会グループ田中繁道理事長が学会長、医療法人溪仁会法人本部が事務局を務めました。田中理事長は2018年6月開催の第68回の閉会式で学会キーを受け取り、第69回の大会テーマ「その先の、医療へ」を発表。本学会は2019年8月1日・2日に開催し、2025年へ向けた医療の方向性の評価、それ以降の医療のあるべき姿について議論・意見交換を行いました。



医学的研究の長年の成果・貢献が表彰される [札幌西円山病院]

札幌西円山病院の浦信行院長が、平成30年度北海道医師会賞を受賞しました。これは、北海道医師会の所属会員が、医学的研究・医事衛生に関して、北海道を代表する優秀な業績をあげた場合に贈呈されるものです。浦院長は「高血圧・腎疾患診療に係る循環器病学と腎臓病学の研究」について長年の研究成果が評価されました。贈呈式は北海道知事賞と合同で、2018年9月29日に札幌グランドホテルにて行われました。



高橋はるみ知事(当時)やほかの受賞者たちと記念撮影する浦院長(前列右から3番目)

環境への取り組み

溪仁会グループでは、環境活動を通して職員的环境意識向上と地域社会への貢献をめざしています。身近なところの美化運動から、森づくり・リサイクルなど多岐にわたる活動を行っています。

資源回収とリサイクルの取り組み

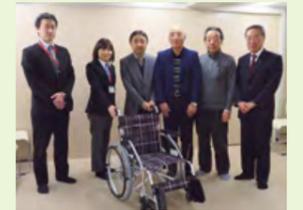
廃油回収の取り組み

使用済みの食用油(植物油)は、リサイクルしてバイオディーゼル燃料などにすることができます。溪仁会グループの各病院・施設では、厨房から出る廃植物油を集め、リサイクル業者に回収を依頼しています。2018年度はグループ内14施設から、合計3,914ℓを回収しました。



リングプル回収活動と車いす寄贈

溪仁会グループでは患者さんおよび利用者さん、ご家族の協力を得ながら、2008年からリングプルの収集を行っています。集めたリングプルは一定量(2019年3月末現在:700kg)で非営利団体を通じて車いすに交換できるため、交換した車いすを各団体に寄贈する活動もあわせて行っています。2018年度は通算8台目の車いすを札幌市手稲区の稲積公園西町内会に寄贈しました。



美化活動で環境意識を高める

おたるドリームビーチ清掃活動

溪仁会グループでは環境保護活動の一環として、2008年から毎年のおたるドリームビーチの清掃を行っています。2018年は6月16日に実施し、グループ職員と家族、北海道科学大学の学生、委託会社および関係者の方など合計166名が集まり、約1時間かけてごみを拾いました。



施設周辺の清掃活動を実施

溪仁会円山クリニックでは、周辺地域のごみ拾いを行う院外清掃を、環境活動の一環として毎年実施しています。2018年は7月26日に実施し、職員15名が参加しました。また、手稲溪仁会病院でも、2018年10月20日に周辺の清掃活動を初めて実施し、13名の職員と家族が参加しました。



溪仁会円山クリニック



手稲溪仁会病院

植樹と環境教育活動

保育園児と共に環境活動

コミュニティホーム白石では、毎月認知症カフェ「レモンカフェコミ白」を開催しています。2018年8月8日開催時は、DCMホームマック株式会社の協力の下、幌東保育園の園児24名と認知症カフェ参加者が、紙製の植樹ポット「カミネッコン」を作成しました。世代間交流と、参加者の環境意識を高める機会となりました。



道民の森で植樹会を開催

社会福祉法人溪仁会では、2011年から当別町にある道民の森で植樹会を実施しています。2018年は9月22日に予定したものの北海道胆振東部地震の発生で中止。その後DCMホームマック株式会社の協力で、10月6日に合同植樹会を実施することができました。30名の職員・家族が参加し、各施設で用意したカミネッコンを含む約1,200本を植樹しました。





Human Story

溪仁会グループでは、
さまざまな人が多様な働き方をしながら活躍しています。
医療や福祉の現場を支える人たちの、
それぞれのストーリーをご紹介します。

医師の働く環境も変わり始めている。 周囲の理解で、出産や育児がしやすい体制に。

手稲溪仁会病院 産科・婦人科 医長 滝本 可奈子

出産や育児をしながら働く人を、社会や職場がサポートしようという意識が高まっています。溪仁会グループは、出産・育児休暇の取得や子育て中の勤務時間の調整など、職員それぞれの希望に応じた働き方ができる体制を推進。ワークライフバランスを尊重した、働きやすい環境づくりに取り組んでいます。

手稲溪仁会病院産科・婦人科に勤務する滝本可奈子医長は、3人のお子さんを持つ母親でもあります。外来の診察や病棟業務、手術など多忙な医師としての仕事と、出産・育児を両立してきました。最初の出産は、別の病院での研修医時代。そのときに切迫早産を経験したことが、産婦人科医の道に進むきっかけになりました。「主治医の対応にとっても安心感を覚えて、こういう道もあるのだと思いました。産婦人科医であれば、新しい生命の誕生を支えたり、若い患者さんの命を救えることも多いのではとも考えました」

その後、第2子を出産した滝本医長はさらなるスキルアップを考えるようになりました。手稲溪仁会病院は不妊治療・周産期・婦人科腫瘍など幅広い分野の診療経験を積める体制なことから、2015年に入職。その1年後の2016年に第3子を出産しました。

「当科の医師数の多さと手術数や症例数などは札幌でもトップクラスです。現在は14人の医師が在籍していますが、それぞれに得意分野や専門領域があり、高度で幅広い医療を提供しています。医師が多いことで勤務の調整がしやすく、出産や育

児、体調不良などで誰かが休んでも、チームワークで支え合う環境が整っています」と話す滝本医長。男性・女性にかかわらず、出産や育児を応援しようという組織風土があり、その人に合った休み方や勤務体制を選べることで働きやすさにつながっています。

同病院のように、医師の働く環境の改善が進められる一方で、出産や育児が仕事のキャリアに影響するのでは、という声はまだ社会ではあるのも事実です。これに対して滝本医長は「妊娠中や育児中に、同僚と比べて知識や経験が少なくても焦らずに、自分のペースで仕事を続けていくことが大事」と言います。滝本医長自身も妊娠・出産の影響で、数年遅れて専門医を取得しました。「専門医取得に年齢制限はありませんが、妊娠率は年齢とともに低下します。妊娠・出産のために専門医取得が遅れることを、当然のこととして焦らず応援してくれた職場に感謝しています」と振り返ります。

「今後は本格的に不妊治療に携わっていききたい」と話す滝本医長。生殖医療専門医の取得を目標に、スキルアップを図っています。自身の多様な経験をもとに患者さんの心に寄り添い、これからも医療の現場と向き合っていきます。



介護福祉士の資格を取って日本で働くのが目標。 周囲の人の温かいサポートに助けられています。

コミュニティホーム白石 施設ケア部介護課 介護補助員 レーティ・ヌンさん



少子高齢化が進む中、介護の現場では働き手不足が深刻になっています。その課題解決に向けて、外国人留学生に介護職員として働いてもらおうという取り組みが始まっています。

コミュニティホーム白石では、ベトナムからの留学生をパートタイマーとして採用しています。レーティ・ヌンさんは2018年10月に来日し、札幌の日本語学校に通いながら、介護補助員として働き始めました。「日本の人は親切だし、生活も豊か。そんな日本で暮らしてみたいという憧れがあり、日本語を学びながら働こうと思いました」と、来日の動機を話します。

お年寄りに接するのが好きだったことから、介護の仕事を選んだというヌンさん。介護の経験はまったくありませんでしたが、周囲の職員のサポートを受け、一つ一つ仕事を覚えていきました。「みんな優しく、いろいろなことを教えてくれたり、困ったときは助けてくれたりします。安心して働くことができ、毎日がとても楽しい。ここで働けて本当に良かったです」

現在、午前中は日本語学校に通い、午後は同施設で働いています。入浴後の利用者さんの髪を乾かししたり、おやつやお茶を配ったりといった業務のほか、最近は車いすへの移乗を手伝うなど、担当できることが増えています。時には利用者さんの

話し相手になることもあり、笑顔を決やさないヌンさんはとても人気があります。また、自分から積極的に学ぼうという意欲や、空いている時間にできることを探そうとする姿勢が、職員からも高く評価されています。

「まだ日本語は勉強中なので、利用者さんの話がわからないこともあります。そういうときは職員の人に教えてもらいながら、会話をしています。気をつけているのは敬語を使うこと。丁寧な言葉で話すように心がけていますが、日本語は難しいなと思います」

札幌に来た当初は、あまりの寒さに驚いたと笑うヌンさんですが、今では環境にも慣れ、休日は札幌にいるベトナム人の友人と遊びに出かけてリフレッシュをしています。ベトナムの家族とは、毎日連絡を取っていて、年末に帰るのを楽しみにしているそうです。

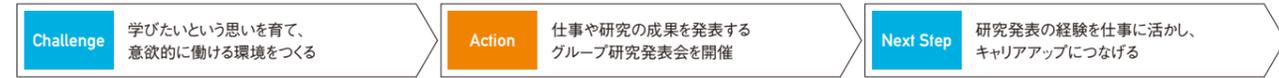
来年の春に日本語学校を卒業した後は、介護福祉士の資格取得をめざし、専門学校に通う予定です。目的意識を持って働くヌンさんに、職員たちも「ずっとここで働いてほしい」とエールを送ります。「一生懸命働きながら勉強をして、資格を取るのが目標です。利用者さんのお世話をするのが好きなので、頑張りたい」。そう話すヌンさんの笑顔は、将来への希望と意欲にあふれています。



学び続けながら成長できる組織に

溪仁会グループは、働く誰もが学び、成長できる環境を整えています。医療、保健、福祉に携わる者としての知識やスキルだけでなく、人間としての成長もサポートしていきます。

自ら学ぶ意欲を応援する溪仁会グループ研究発表会 [溪仁会グループ]



研究の成果を発表できる場を提供

溪仁会グループでは、職員が仕事や研究に取り組んだ成果を発表する機会として「溪仁会グループ研究発表会」を開催しています。

溪仁会グループ研究発表会が初めて開催されたのは当グループ開設から10年がたった1989年のこと。当時の演題数はわずか12題からのスタートでしたが、「医療や福祉に携わる者として業務に係るテーマを研究し、サービスの質の向上を図る」という目標のもと、開催を続けてきました。その結果、現在では当グループを代表するイベントとして位置づけられるようになりました。

30回目となる記念大会は2018年11月10日に札幌コンベンションセンターで開催され、当グループの14の病院や施設などから24の職種が参加。演題数は114題に上りました。会場では、職場や職種、キャリアなどの垣根を越えて、情報交換や交流が行われ、コミュニケーションを促進する場にもなりました。

自ら考え、人に伝えることで成長する

札幌西円山病院の浦信行院長は、第28回から第30回まで、プログラム委員長を務めました。さまざまな職種が研究発表に熱心に取り組む姿が心に強く残ったと振り返ります。「日々の仕事の中で興味や関心を持ったことを掘り下げ、その成果をどうまとめ、どう伝えるかというプロセスを経ることで、その人は大きく成長します。また、研究発表を行うことが、仕事のモチベーション向上にも役立っているのだ



2018年の溪仁会グループ研究発表会は30回目の記念大会となりました

と思います。外部の方からも非常に高い評価を受けていて、当グループの研究発表会は誇るべき取り組みだと考えています」

各病院や施設も、研究に取り組もうとする職員の意欲を大切にしています。職場の協力体制があることも、演題数が増える要因になっています。「職場の理解やサポートがあるから、職員は意欲的に研究発表会に臨むことができます。その経験が、仕事や生きる上での自信につながるのです」と浦院長は言います。



札幌西円山病院 院長 浦 信行

研究発表会を足掛かりにさらなる高みへ

当グループの研究発表会に参加したことで、さらに研究を深め、外部の学会や研究大会などに参加する職員も増えています。また、ほかの職員の研究発表に触発され、もっと学びたいという意欲を持つ人も多く、ステップアップのきっかけにもなっています。こうした効果について浦院長は「当グループの研究発表会をファーストステップにして、さらに高みをめざしてほしい。研究に取り組んだり、成果を発表することが当たり前になってくれれば」と話します。

医療や福祉の仕事に携わる職員が、学びを通して成長し、その成果を仕事に活かすという好循環によって、組織も成長していきます。当グループは職員の意欲や熱意を大切に、誰もが学ぶことができる環境づくりを続けていきます。

会場では「認知症サポーター養成講座」も実施しました



スライド発表とポスター発表を合わせて114演題が寄せられました

溪仁会グループ 研究発表会 参加者の声

職員を応援しようという組織風土が 仕事への意欲につながっています

利用者さんへの接し方一つでその方の心や体の動きが大きく変化することを目の当たりにした経験から、ケアの効果を研究してみたと思いました。職場の上司や先輩から「貴重な経験になる」と勧められ、溪仁会グループ研究発表会に参加することを決めました。研究内容へのアドバイスや事前の発表練習など、周囲の人たちがさまざまなサポートしてくれたことが支えになりました。初めての参加で優秀演題を受賞できたのは、職場の理解や応援があったおかげだと感謝しています。

グループ研究発表会に参加したことで、ケアに対する理解が深まっただけでなく、人にわかりやすく伝える話し方なども意識するようになりました。努力や工夫をしたことが評価されると、さらに新しいこ

とに挑戦しよう、学んだことを実践しようという意欲につながり、働く楽しさを感じられるようになります。今後はそうした自分の経験をもとに、グループ研究発表会への参加をめざす後輩たちをサポートしたいと考えています。



日々のケアの中での経験や気づきを研究発表としてまとめたことが、サービスの向上や改善に役立っています

月寒あさがおの郷 生活支援課 ユニットリーダー

内村 勇太

(2018年溪仁会グループ研究発表会優秀演題「動きの獲得によるBPSDの消失」)

多様な学びの場で知識やスキルの向上を支援

NST専門療法士実地修練を実施

[手稲溪仁会病院]

2018年6月5日から14日にかけて、NST (Nutrition Support Team: 栄養サポートチーム) の一員としてより高度な栄養管理を行うために必要な知識と技術を学ぶ研修が行われました。手稲溪仁会病院から12名、札幌西円山病院から2名が受講し、修了後にNST専門療法士認定試験の受験資格を取得しました。



医療安全のプロフェッショナルに学ぶ

[手稲溪仁会病院]

2018年7月3日に第48回医療安全職員研修会を開催しました。近畿大学病院安全管理部教授で医療安全対策室長の辰巳陽一氏を講師に招き、「～プロジェクト・アリストテレスから学ぶ～医療における安心と安全」と題した講義が行われました。医療の現場における安全対策の実例を交えた辰巳教授の話に、参加者は熱心に耳を傾けていました。



組織横断的な研修会で交流も促進

[溪仁会グループ]

溪仁会グループは、職員が職場の枠を超えて共に学び、交流を図る機会を大切にしています。2018年8月18日には第4回溪仁会グループリハビリテーション研修会が開催され、129名が参加。認知症リハビリテーションに関する講演の後、認知症の方の立場に立ったケアについてグループワークを行い、意見を交わしました。



北海道緩和ケア研修会を開催

[手稲溪仁会病院]

手稲溪仁会病院は地域がん診療連携拠点病院として「北海道緩和ケア研修会」を主催しています。2018年は12月15日に開催され、医師や看護師など41名が参加。講義のほかにロールプレイとグループワークが行われ、実践力を高めました。同病院ではこれからも緩和ケアの実践や普及に向けた活動を推進していきます。



医療と福祉の未来をつなぐ地域の人財を育てる

これからの医療、保健、福祉のサービスを支えていく人財は、子どもたちや若者を中心とした地域の方々です。 溪仁会グループでは、地域の方々の関心を高めるさまざまな催しや取り組みを行っています。

介護の仕事の魅力を伝える 「未来へつなぐ福祉フェスタ」を開催

〔西円山敬樹園・社会福祉法人溪仁会〕

Challenge

人口減と人手不足が加速する時代にも 質の高い福祉サービスを継続

Action

介護の仕事の魅力を地域の方々に 伝えるイベントを開催

Next Step

認知症や障がいなどへの住民の理解を深め より良い地域づくりも展開

「共感」とより良い地域づくりをテーマに開催

社会福祉法人溪仁会は、西円山敬樹園が主体となって、4回目となる「未来へつなぐ福祉フェスタ」を2018年10月16日に開催しました。これは中学生や高校生、高齢者や主婦などの一般の方を対象に、福祉・介護の魅力を伝えるために、北海道が進める「介護のしごと魅力アップ推進事業」の一環として、2015年から開催を続けている体験型イベントで、今年は約150名の参加がありました。

北翔大学北方圏学術情報センターポルト（札幌市中央区）を会場に、「共感から始まる地域デザイン！」をテーマとした本イベントのオープニングセレモニーで、社会福祉法人溪仁会の谷内好理事長から今回のテーマについて「相手の立場や状況に共感し、理解することで、より良い地域をつくり上げていこうとする姿勢が重要」と説明がありました。本イベントでは北翔大学の学生をはじめ、地域の方々と協力してさまざまな展示や催しを行いました。



「VR認知症体験」では、参加者は専用のヘッドマウントディスプレイとヘッドホン装着し、認知症の症状を体験しました



「VR認知症体験」のプログラムを開発した株式会社シルバードの下河原忠道代表取締役による講演も行われました

先端技術の体験も含め介護の未来を感じる機会に

今回は、介護ロボットやバーチャルリアリティ（VR）などの先端技術を福祉介護の世界に取り入れた姿を示すことをテーマの一つに掲げました。株式会社シルバード提供による「VR認知症体験」では、車を降りるだけでも突然ビルの屋上に立たされたような恐怖を感じる「視空間失認」や、それまで見えていた人や動物が突然視界から消える「レビー小体型認知症」による幻視などを疑似体験しました。60名の参加者には高校生や大学生も多く、「認知症に対する認識が変わった」「理解が深まったように思う」といった感想が聞



さまざまな介護・福祉用具のほか、介護・セラピーロボットなども展示しました



北翔大学教育文化学部芸術学科の学生とコラボレーションしたシニアファッションショー

地域の人財を育てる溪仁会グループの活動

看護に関心を持つ高校生に体験の機会を [定山溪病院・手稲溪仁会病院]

5月12日の「看護の日」にちなんで、看護師志望の高校生に看護活動に触れる機会をつくる「ふれあい看護体験」を実施しています。2018年は5月9日に定山溪病院、5月11日に手稲溪仁会病院で開催。それぞれ9名が参加し、定山溪病院では車いすの乗車体験や患者さんの食事介助など、手稲溪仁会病院では患者さんの洗髪介助や足浴介助のケアなどを体験しました。



手稲溪仁会病院

定山溪病院

中学生が外科医師の仕事模擬体験 [手稲溪仁会病院]

2018年7月21日に、手稲区の中中学生を対象とした「第8回 ブラック・ジャック セミナー」を開催し、18名の参加がありました。参加者は、手術用縫合糸による結紮*の指導を受けたほか、手術台で鶏肉を使つての模擬手術体験を行うなど、医師をはじめとしたスタッフの指導のもとでさまざまな体験プログラムを行いました。

*外科手術の際に血管などを糸で結ぶこと



高校生が介護施設入居者と交流 [きもべつ喜らめきの郷・るすつ銀河の杜]

きもべつ喜らめきの郷とるすつ銀河の杜は、開設以来留寿館高等学校1年生の見学を受け入れており、介護施設を知る機会や利用者さんとの交流の機会を提供しています。2018年5月15日に生徒12名と教員2名が両施設を訪れ、ユニットケアについての説明を受けるとともに、利用者さんとの交流会に参加しました。



リサーチ型企業研修の中中学生を受け入れ [手稲溪仁会病院]

中高一貫校の市立札幌開成中等教育学校は、札幌市の「課題探究的な学習モデル事業」のモデル校となっており、同校の3～4年生は夏期休暇中にリサーチ型企業研修を行っています。同校からの要請に協力し、2018年8月6日から10日の5日間、手稲溪仁会病院で2名の研修を実施。薬剤部の無菌室での薬調合体験など、1日1部署を回る形で5つの仕事に挑戦しました。



介護・福祉現場の未来を協働で考える [西円山敬樹園・医療法人稲生会ほか]

株式会社studio-L主催の「これからの介護・福祉を考えるデザインスクール」は、厚生労働省補助事業で、介護・福祉の現場で働く人や興味を持つ学生、企業・デザイナーが参加し、全6回のプログラムでさまざまなアイデアを考える取り組みです。2019年3月9日には北海道地区プロジェクト提案会が行われ、溪仁会グループから西円山敬樹園、医療法人稲生会、コミュニティホーム白石の職員が参加しました。



第4章
サービスの
質向上への
取り組み

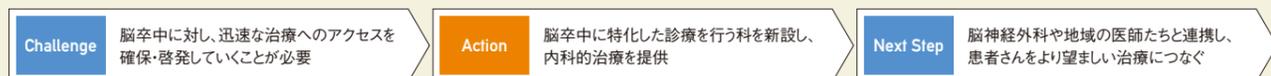


数字で読み解く 溪仁会グループ

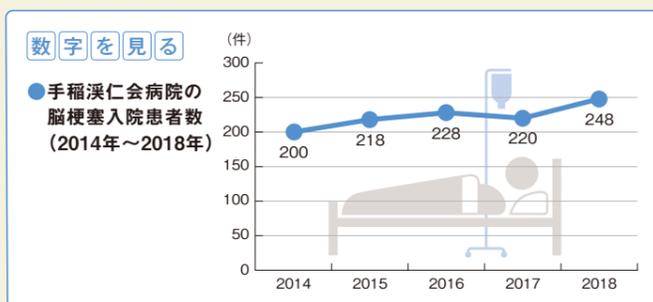
より良いサービスを提供していくためには、取り組みの結果をデータに残して分析・検証することが必要です。そこで、さまざまな取り組みや活動の残す「数字」に注目してみました。

脳血管内科(脳神経内科)外来を開始

[手稲溪仁会病院]

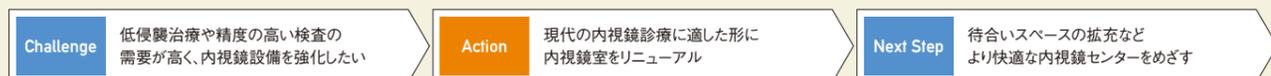


脳卒中は日本の死亡率の第4位、寝たきりの原因の第1位である疾患で、急性期治療は日進月歩の発展を遂げています。しかし脳卒中は発症からすぐ受診することが重要で、適切な治療に結びつく患者さんの割合はまだ低いのが現状です。そこで手稲溪仁会病院では、2018年1月から脳卒中、特に脳梗塞に特化した診療を行う脳血管内科(脳神経内科)を開設し、外来診療を始めました。内科的な診断、急性期治療から再発予防まで、幅広い範囲の診療を担っています。また、脳神経外科と共に脳卒中センターとして、脳血管内治療の実施や24時間の救急対応も行っています。



内視鏡センターがリニューアルオープン

[手稲溪仁会病院]



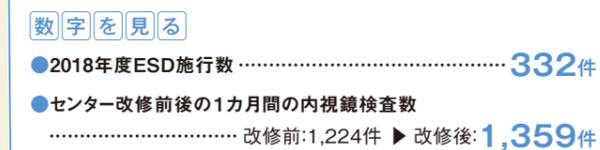
手稲溪仁会病院では、2018年11月12日に内視鏡センターをリニューアルしました。内視鏡の粘膜下層剥離術(ESD)を行うESD治療室は、将来の設備増強を見越して広い設計にし、モニターの視認効果を高めるブルーライトを導入。その他の検査室は個室化したほか、数は一室減らしてバックヤードを広く取ることで、スタッフの業務や移動がスムーズになりました。鎮静希望者の増加に応え、リハビリ室を拡張した上、ナースステーションの隣に設置して緊急時にも対応ができるようにしています。患者さんが快適に検査・治療を受けられるよう、今後は待合スペースの拡充なども進めていきます。



ESD治療室

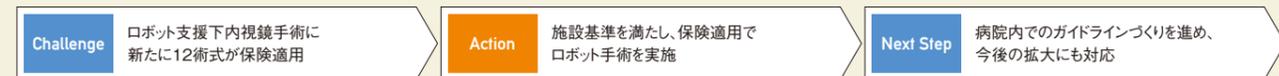


リハビリ室



手術支援ロボット「da Vinci」保険適用拡大に対応

[手稲溪仁会病院]



手稲溪仁会病院では、2011年に北海道で初めて手術支援ロボット「da Vinci」での前立腺がん手術を行って以来、ロボット手術に積極的に取り組んできました。現在は最新型のda Vinci Xiを導入し、精度が高く、合併症のリスクも少ない手術を実施しています。

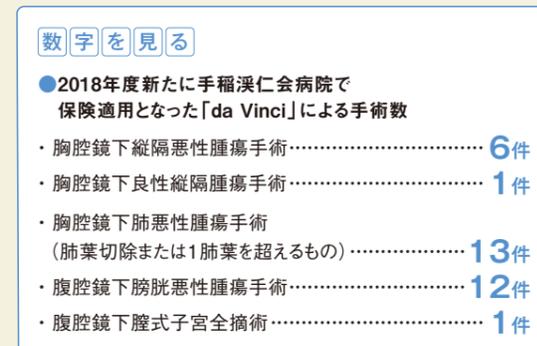
2018年4月の診療報酬改定で、ロボット支援下内視鏡手術はこれまでの2術式のみから12術式増加し14術式が保険適用となりました。手稲溪仁会病院では新たに6術式において施設認定を受け、患者さんに低侵襲な手術を提供しています。



da Vinciを操作する医師

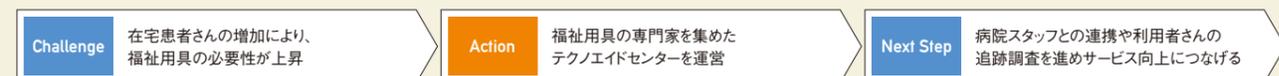


da Vinci Xiでの手術の様子

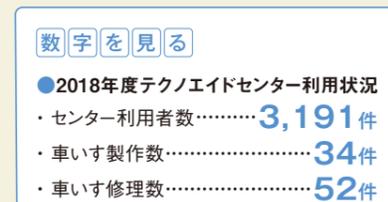


テクノエイドセンターの取り組み

[札幌溪仁会リハビリテーション病院]

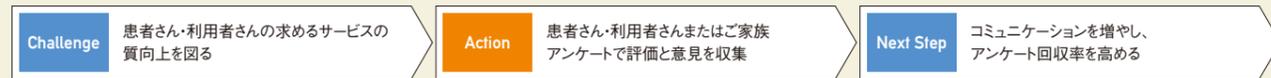


札幌溪仁会リハビリテーション病院では、2017年10月に道内初の民間医療法人によるテクノエイドセンターを開設し、2018年6月に補装具・日常生活用具業者として登録しました。シーティング外来と連携し、患者さんの体や状況に合った車いすや各種補装具を提供するほか、退院後の修理にも対応しています。また、福祉用具専門相談員の有資格者が在籍し、医師やリハビリスタッフにも専門の視点でアドバイスをしています。今後は患者さんの退院後の様子や車いすの利用状況などを調査し、入院・外来・在宅のシームレスなサービス展開を進めていく予定です。



サービスの質を見直すアンケート調査の取り組み

[溪仁会グループ各事業所]



溪仁会グループの各病院・施設では、患者さんや利用者さん、ご家族へサービスの質への満足度やご意見をうかがうためのアンケートを実施しています。アンケートを集計することで、提供しているサービスの質がふさわしいか、サービスを受ける方の希望とかけ離れていないかを検証し、

改善のための活動へとつなげています。2018年度に実施した各施設のアンケートの中から、2施設の取り組みをピックアップして紹介します。

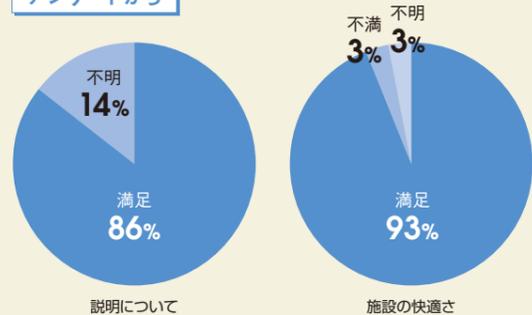
菊水こまちの郷

担当者より

当施設では2カ月に1回、利用者さんのご家族を交えた運営推進会議を開催し、ご意見を運営に生かす体制を整えています。しかし、会議に参加されないご家族の意見も集めたいため、年に1度「ご家族さまアンケート」を実施しています。遠方にお住まいだったり、ご家族が高齢だったり、面会に来るのも困難な方のご意向もアンケートで確認しています。アンケート回答では、施設の開設から年数がたちハード面が古くなっ

たことによる、臭気についてのご意見は毎年寄せられるので、消臭剤の種類や設置量、取り替え頻度を検討し適宜変更しています。その他ケアや接遇面のご意見は、その要因がコミュニケーション不足にある場合が多く、職員間でも共有して対応力向上につなげています。看取りのニーズも増してきているので、最期まで過ごしていただく際に、どのようなご希望があるか調査を加えていきたいと思ひます。

アンケートから



アンケートから寄せられた声

- 職員の人たちは気軽に話しかけることができ、しっかりと対応してくれている。
- ほかの施設に比べ臭気がないところが気持ちいいですが、たまに玄関から臭うときがあります。
- 先日の地震の際も連絡をいただけ、ほかにも体調の管理や不調の際の対処、連絡など特に良いと思ひます。

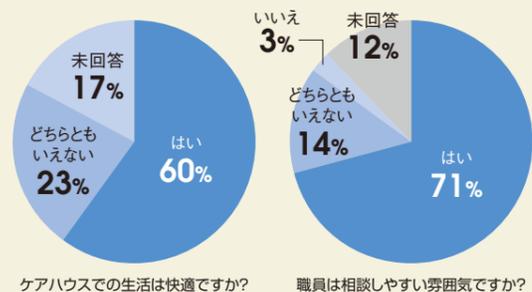
カームヒル西円山

担当者より

当施設は生活の場所であり、入居者さんはさまざまなご希望をお持ちで、毎年1～2月に話し合いの場として入居者懇談会を行っています。入居者アンケートはそれに向けて11月に実施、12月に集計を行っています。また重大な意見が寄せられた場合は、懇談会以外にも検討会を実施します。入居者さんにとっては伝えたい要望が検討されていることが可視化されることで、信頼感の醸成にもつながってきたと感じます。

施設にはさまざまな知識・技能をお持ちの方がお住まいです。アンケートで避難訓練のマンネリ化が指摘されていたため、2018年度は防災の知識をお持ちの入居者さんに訓練計画からご参加いただき、職員のみで考えるよりも、住んでいる方の実感に基づく訓練にすることができました。課題はアンケート回収率で、今後のはたらきかけが重要と思ひています。

アンケートから

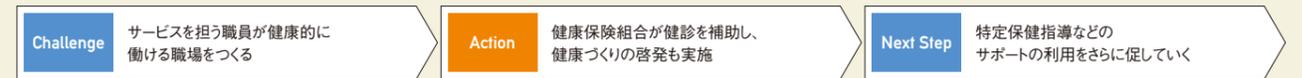


アンケートから寄せられた声

- 避難訓練での火元の想定をボイラー室にしたのは大変良かった。ただ避難場所はわかりにくかった。
- 文化祭の職員の積極的なバックアップ、余興の歌がよかったです。
- 廊下の壁を手入れするか、何かを展示したほうが良いと思ひます。

組織を支える職員の健康を守る

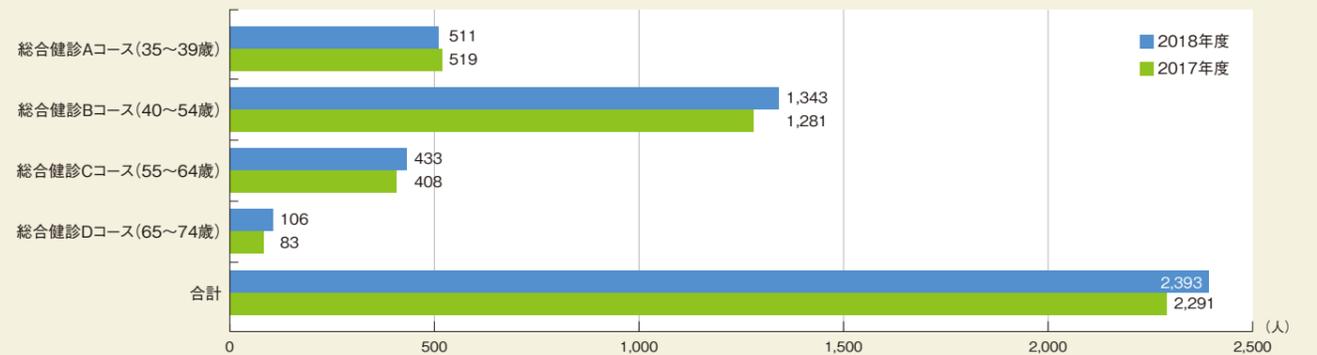
[溪仁会健康保険組合]



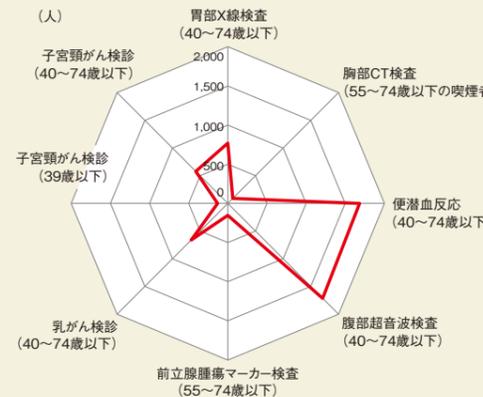
溪仁会健康保険組合には、現在グループ全職員とご家族6,674名が加入しています。毎年度、職員(被保険者)に総合健診(年齢階層別・生活習慣病予防健診)、各種がん検診の受診費用を補助するほか、ご家族(被扶養者)の健診にも補助を行っています。また、健診結果にメタボリックシンドロームのリスクがみられた対象者

には動機づけ支援を行い、特にリスクの高い対象者には積極的支援の特定保健指導などのサポートを行うもので、実施率の改善が課題でした。2018年度はグループ事業所とのコラボヘルス推進で働きかけを強め、実施率は26.6%と前年度の約3倍に向上することができました。

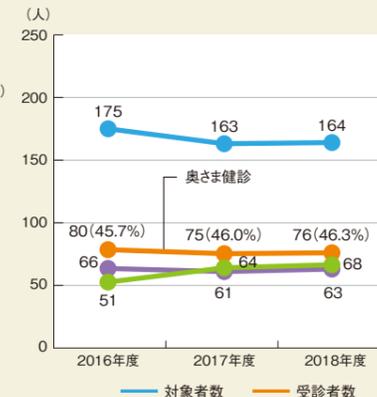
● 被保険者(35歳～75歳未満)の健保補助を利用した年度別健診実績



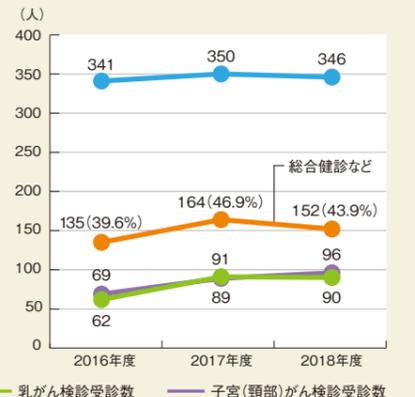
● 被保険者(35歳～75歳未満)が健保補助を利用したがん検診などの2018年度受診実績



● 被扶養者(39歳以下の女性配偶者)の奥さま健診などの年度別受診実績

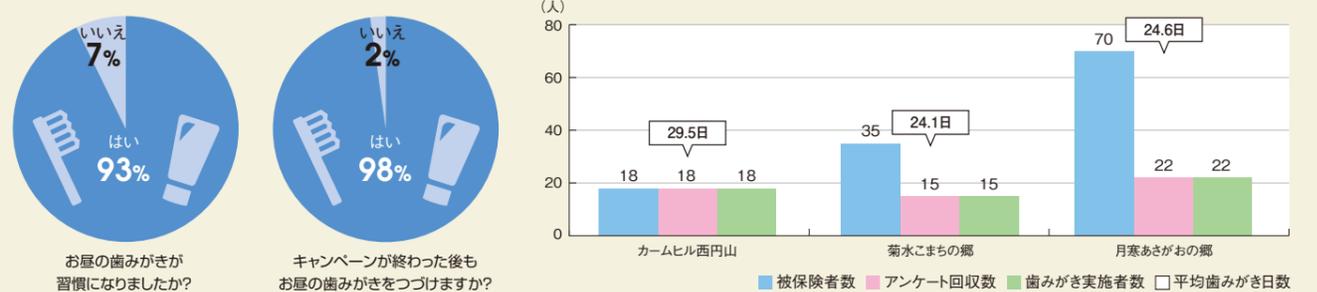


● 被扶養者・任意継続加入者(40歳から75歳未満)の生活習慣病予防健診(特定健診)などの年度別受診実績



● お屋の歯みがきキャンペーン

データヘルス計画(保健事業)の一環で、歯周病予防の啓発活動を行っています。前年度と比較し、歯科医療費の増加幅の大きい3事業所の被保険者全員に歯みがきセットを配布、30日間食後の歯みがきを実行してもらいました。歯みがきは「自覚症状の改善」が実感できるため、歯周病予防には日ごろの口腔ケアが重要であり、早期治療・健康意識向上につながっています。



グループの基本データ編

●総事業所数 **83** ●総敷地面積 **327.04**(千㎡)

●グループ職員総数 **4,964**名

職業別人数
医師:380名、看護職員:1,627名、介護職員:1,053名、セラピスト:510名、
その他医療資格者:336名、事務職員その他:1,058名

男女別職員数*
医療法人:男性1,002名/女性2,667名(管理職:男性165名/女性92名)
社会福祉法人:男性394名/女性817名(管理職:男性74名/女性27名)

*医療法人・社会福祉法人のみ

ワーク・ライフ・バランス

産休・育休取得者数 **98**名 (医療法人:85名、社会福祉法人:13名)

院内保育所利用園児数(延べ) **43,524**名 ※手稲溪仁会病院・札幌西円山病院・定山溪病院の合計

医療・保健のデータ編

●総ベッド数

1,827床

※2019年3月現在

手稲溪仁会病院670床
手稲家庭医療クリニック19床
札幌溪仁会リハビリテーション病院143床
札幌西円山病院603床

札幌西円山病院 介護医療院60床
定山溪病院326床
溪仁会円山クリニック6床

●ドクターヘリ出動件数

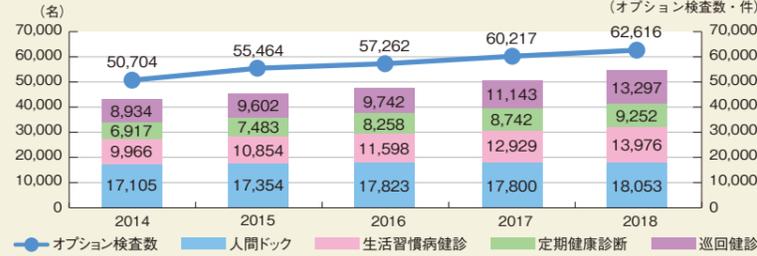
376件

出動要請件数750件

●1日あたりの外来・入院患者数

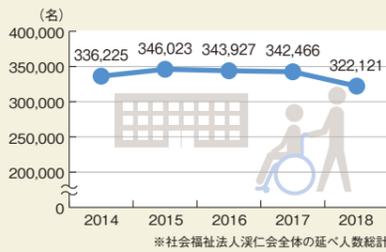


●健診・オプション検査の受診数(溪仁会円山クリニック)

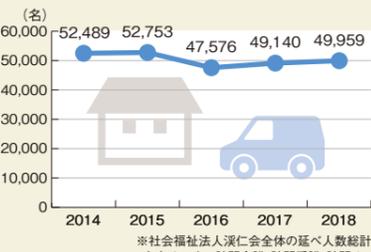


介護・福祉のデータ編

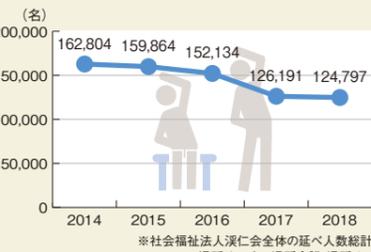
●施設入所者数



●訪問サービス利用者数



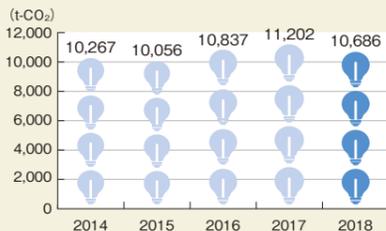
●通所サービス利用者数



環境のデータ

※環境負荷のデータはすべて医療法人のみ

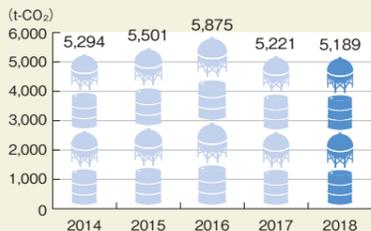
●電気使用量



●車両燃料(ハイオクレギュラーガソリン・軽油)



●建物設備維持燃料(都市ガス・灯油・A重油・LPG)



財務のデータ編

●2018年度の各法人の収益(単位:百万円)

医療法人 溪仁会 **39,726**

社会福祉法人 溪仁会 **6,504**

その他関連法人 (株式会社ソーシャル、医療法人稲生会) **789**

各事業所の数字

手稲溪仁会病院

治療とケア

●外来延べ患者数 **194,316**名(1日平均780名)
●入院延べ患者数 **215,845**名(1日平均591名)
●平均在院日数 **9.5**日
●病床稼働率(退院患者を含む延べ患者数計算) **88.3%**

●チーム医療
クリニカルバス施行数 8,342件
クリニカルバス種類 226種類(2019年3月31日現在)
栄養食事指導件数(非加算指導含) 外来3,178件/年、入院8,163件/年
NST(栄養サポートチーム)介入延べ患者数 3,158件/年
服薬指導件数 18,934件/年
リハビリテーション実施単位数(入院・外来合計) 288,067

●救急医療
救急患者数 **22,035**名(内救急車5,593名、ヘリ搬送患者数199名)

手稲溪仁会クリニック

治療とケア

●外来延べ患者数 **109,094**名(1日平均438名)
●職員数 **80**名

手稲家庭医療クリニック

治療とケア

●外来延べ患者数 **24,156**名
●入院延べ患者数 **5,639**名
●訪問診療(往診含)延べ患者数 4,654名
●看取り患者数 病棟106名/在宅64名
●予防接種実施人数 3,384名
●栄養指導実施数 1,298件
●訪問看護延べ利用者数(はまなす訪問看護ステーション) 13,480名
●職員数 **78**名

札幌西円山病院

リハビリと療養

●外来延べ患者数 **21,094**名(1日平均86.1名)
年齢別外来患者割合 50歳未満19.7%、50歳~60歳未満11.8%、60歳~70歳未満14.1%、70歳~80歳未満18.8%、80歳~90歳未満22.6%、90歳以上13.0%

●入院延べ患者数 **208,712**名(1日平均571.8名)
●入院患者平均年齢 **80.7**歳

●患者分類別状況(入院)
医療療養病床 医療区分1・1.1%/医療区分2・59.4%/医療区分3・39.5%

●地域別患者数
札幌市内529名(中央区166名、西区83名、その他280名)、石狩22名、後志14名、空知27名、胆振・日高8名、その他道内31名、道外2名

●リハビリテーション実施単位数(入院) **532,489**(医療保険525,860/介護保険6,629)

●職員数 **845**名

札幌西円山病院 介護医療院

介護

●平均要介護度 **4.56**(入所)
●1日当たり実績 入所 **59.8**名/日(定員60名)
●職員数 **34**名

溪仁会円山クリニック

保健

●健診受診者数
人間ドック18,053名、生活習慣病健診13,976名、定期健康診断9,252名、巡回健診13,297名

●オプション検査数内訳
婦人科検査(乳がん、子宮がん、卵巣がん)19,018名、CT検査(頭部、胸部、腹部)3,146名、その他(胃内視鏡、腫瘍マーカー、骨粗しょう症検査)40,452名

●契約団体数
保険者330団体、事業所数約3,500件

●職員数 **139**名

●診療関連
年間手術件数 **8,997**件
難易度別手術割合 高難度(E)1.4%、中難度(C-D)93.5%、低難度(A-B)5.1%
年間消化器内視鏡検査数 13,962件

●周産期医療
年間分娩件数 609件
NICU稼働率(退院患者を含む延べ患者数計算) 76.6%

●地域医療連携(連携医療機関数) **618**機関(病院124、クリニック494)
連携登録医師数 694名(病院151名、クリニック543名)
患者紹介率/逆紹介率 77.3%/68.9%

●職員数 **1,726**名

札幌溪仁会リハビリテーション病院

リハビリとケア

●外来延べ患者数 **11,397**名(1日平均31.2名)
●入院延べ患者数 **49,969**名(1日平均136.9名)
●入院患者平均年齢 **78.4**歳
年齢別患者割合 50歳以下9.2%、51歳~60歳11.9%、61歳~70歳16.7%、71歳~80歳25.6%、81歳~90歳29.3%、91歳以上7.3%

●平均在院日数 62.8日
●在宅復帰率 86.7%

●リハビリテーション実施単位数 外来**16,402**/入院**346,272**

●訪問リハビリテーション実施単位数 **32,314**(医療保険19,294/介護保険13,020)

●実績指数(点) 40.84
●職員数 **322**名

定山溪病院

リハビリと療養

●外来延べ患者数 **13,311**名
●入院延べ患者数 **116,271**名
●入院患者平均年齢 **73.9**歳
年齢別患者割合 40歳未満2.8%、40歳~50歳未満4.6%、50歳~60歳未満9.5%、60歳~70歳未満17.5%、70歳~80歳未満26.3%、80歳~90歳未満26.3%、90歳以上13.0%

●地域別患者数
札幌市内217名(南区107名、その他110名)、石狩14名、小樽10名、ニセコ2名、蘭越2名、喜茂別4名、倶知安5名、共和2名、岩内5名、積丹・古平・仁木各1名、空知9名、上川2名、留萌2名、胆振2名、オホーツク2名、宗谷1名、日高1名、道外2名

●リハビリテーション実施単位数(入院) 86,678
●訪問リハビリテーション実施単位数 22,869
●デイケア延べ利用者数 4,680名

●介護予防啓発普及事業(介護予防センター定山溪)
開催回数 **103**回
延べ参加者数 **1,705**名
●職員数 **326**名

泊村立茅沼診療所

地域医療

●外来延べ患者数 **7,261**名

●保健予防活動
予防接種 1,106名 肝炎ウイルス検診 1名
生活習慣病健診 2名 骨粗しょう症検診 14名
特定健診 20名 大腸がん検診 5名
肺がん検診 3名 前立腺がん検診 1名
各種ドック検診(脳、腹部、心臓) 7名 学校等健診 446名
甲状腺スクリーニング 1名 企業健診 785名

●主治医意見書作成 **72**名
●職員数 **8**名

喜茂別町立クリニック

●延べ患者数	8,489名
●保健予防活動	2,280名
予防接種	1,643名
事業所健診	138名
バースデイ健診	114名

西円山敬樹園

●平均要介護度	3.9(入所)
●1日当たり実績	
入所	113.6名/日(定員123名)
グループホーム西円山の丘	26.4名/日(定員27名)
短期入所生活介護	7.3名/日(定員14名)
通所介護	24.2名/日(定員30名)
訪問介護	28.0回/日
●居宅介護支援	延べ1,495件
●介護予防センター延べ相談件数	円山41件、曙・幌西60件
●研修参加・実施状況	
外部研修	参加56回
内部研修	開催全体18回、各部署42回
●職員数	158名

月寒あさがおの郷

●平均要介護度	3.8(入所)
●1日当たり実績	
入所	75.5名/日(定員80名)
短期入所生活介護	4.0名/日(定員8名)
通所介護	34.3名/日(定員45名)
●研修参加・実施状況	
外部研修	法人本部・深仁会グループ主催研修含め全国老協、介護報酬改定、医療安全講習会、日本褥瘡学会北海道地方会学術集など
内部研修	褥瘡予防基礎研修、感染予防、虐待防止など
●職員数	97名

きもべつ喜らめきの郷

●平均要介護度	3.7(入所)
●1日当たり実績	
入所	59.7名/日(定員80名)
訪問介護	3.3回/日
●研修参加・実施状況	
外部研修	参加45回、延べ93名参加、認知症介護実践研修、介護職員実務者研修、全道老人福祉施設研究大会など
内部研修	開催19回、延べ250名参加、ハラスメント、リスクマネジメント、感染対策、交通安全、事故防止など
●職員数	64名

岩内ふれ愛の郷

●平均要介護度	3.9(入所)
●1日当たり実績	
入所	50.1名/日(定員50名)
短期入所生活介護	8.6名/日(定員10名)
●研修参加・実施状況	
全職員参加の施設内(一部施設外)研修を毎月開催。記録記載、不適切ケア、腰痛予防、事故発生防止など	
●職員数	44名

地域医療

学校内科健診	146名
学校心臓健診	23名
保育園健診	118名
乳幼児健診	98名
●職員数	9名

手稲つむぎの杜

●平均要介護度	4.3(入所)
●1日当たり実績	
入所	78.8名/日(定員80名)
短期入所生活介護	8.0名/日(定員10名)
通所介護	53.9名/日(定員65名)
認知症対応型通所介護	9.0名/日(定員12名)
●居宅介護支援	延べ1,628件
●介護予防センター延べ相談件数	71件
●障がい者相談支援事業	5,141件
●研修参加・実施状況	
外部研修	参加119回(深仁会グループ・キャリア支援課主催研修含む)、延べ311名参加、認知症介護実践者・実践リーダー研修、老人福祉施設研究大会など
内部研修	開催22回、延べ207名参加、感染対策研修、虐待防止研修、事故防止研修、褥瘡予防研修、看取りケア研修などを実施
●職員数	130名

菊水こまちの郷

●平均要介護度	4.4(入所)
●1日当たり実績	
入所	28.3名/日(定員29名)
小規模多機能型居宅介護	28.4名/日(登録定員29名)
認知症対応型通所介護	0.1名/日(定員3名)
●研修参加・実施状況	
外部研修	参加42回、延べ44名参加、介護初任者研修、実務者、小規模多機能型サービス等計画作成担当者研修など
内部研修	開催11回(うち外部講師2回依頼)、延べ235名参加、接遇、リスクマネジメント、認知症の理解、緊急時対応、感染対策など
●職員数	52名

るすつ銀河の杜

●平均要介護度	3.3(入所)
●1日当たり実績	
入所	27.6名/日(定員29名)
通所介護	5.2名/日(定員10名)
●居宅介護支援	延べ553件
●研修参加・実施状況	
外部研修	参加30回、延べ54名参加、内容はきもべつ喜らめきの郷と同様
内部研修	きもべつ喜らめきの郷と合同
●職員数	32名

コミュニティホーム岩内

●平均要介護度	3.0(入所)
●1日当たり実績	
入所	99.8名/日(定員100名)
通所リハビリテーション	40.9名/日(定員50名)
訪問看護	18.9名/日
●居宅介護支援	延べ401件
●地域包括支援センター延べ相談件数	201件
●研修参加・実施状況	
新入職員研修3名、介護技術研修11名など延べ153名参加	
●職員数	148名

コミュニティホーム白石

●平均要介護度	2.8(入所・コミュニティホーム白石のみ)
●1日当たり実績	
入所	93.7名/日(定員100名)、白石の郷17.0名/日(定員18名)
短期入所生活介護	16.5名/日(定員19名)
通所リハビリテーション	38.1名/日(定員50名)
通所介護	(白石の郷)37.0名/日
訪問介護	22.2回/日
訪問リハビリテーション	8.5回/日
●居宅介護支援	延べ2,187件
●地域包括支援センター延べ相談件数	1,545件
●介護予防センター延べ相談件数	白石中央46件
●研修参加・実施状況	
外部研修	認知症実践およびリーダー研修5名、北海道抑制廃止研究会1名、高齢者虐待防止研修会8名参加他(合計延べ208名が参加)
内部研修	防災研修会48名、安全運転講習会45名、感染予防研修会42名参加他
●職員数	203名

コミュニティホーム美唄

●平均要介護度	2.7(入所)
●1日当たり実績	
入所	78.6名/日(定員80名)
通所リハビリテーション	52.4名/日(定員65名)
●研修参加・実施状況	
内外合わせて26回、延べ44名参加。深仁会グループ研修会、老健協主催研修会など	
●職員数	95名

美唄市東地区生活支援センター すまいる

●平均要介護度	1.6(通所介護)
●1日当たり実績	
通所介護	20.3名/日
訪問介護	53.0名/日
●居宅介護支援	延べ2,423件
●福祉入浴	2,303名
●高齢者世話付住宅生活援助員派遣事業	4,102件
●研修参加・実施状況	
集合研修延べ11名参加、内部研修延べ345名参加、訪問介護事業所内研修月1回、通所介護・居宅介護事業所内研修会2カ月に1回	
●職員数	49名

青葉ハーティケアセンター

●平均要介護度	1.7(通所介護)
●1日当たり実績	
通所介護	35.1名/日(定員50名)
訪問看護	17.0名/日
小規模多機能型居宅介護	27.5名/日(定員29名)
●居宅介護支援	延べ1,620件
●研修参加・実施状況	
北海道高齢者虐待防止推進研修会、ケアプラン作成の方法、他多数実施	
●職員数	49名

株式会社ソーシャル

●訪問介護利用者数	4,103名(月平均342名)
延べ利用回数	32,388回(月平均2,699回)
●札幌市訪問介護相当型サービス利用者数	4,135名(月平均344名)
●職員数	90名(うちパート72名)

コミュニティホーム八雲

●平均要介護度	3.2(入所)
●1日当たり実績	
入所	88.1名/日(定員90名)
通所リハビリテーション	32.7名/日(定員55名)
訪問リハビリテーション	7.5名/日
訪問介護	8.8回/日
●居宅介護支援	延べ1,115件
●研修参加・実施状況	
外部研修(法人内)・・・合計27回、延べ99名参加、新任役職者研修、中堅管理職講座、リハビリ合同研修会など	
外部研修(法人外)・・・合計18回、延べ26名参加、ケアアセスメント研修、虐待防止推進研修、口腔ケア・口腔リハビリ研修など	
内部研修・・・合計10回、延べ345名参加、接遇マナー研修、転倒転落アセスメント研修など	
●職員数	98名

カムヒル西円山

●平均要介護度	1.0(入所)
●1日当たり実績	
入所	98.3名/日(うち特定入居者42.8名/日、定員100名)
●研修参加・実施状況	
14回、延べ47名参加、外部は老人福祉施設協議会など、内部は高齢者虐待防止研修など	
●職員数	19名

おおしまハーティケアセンター

●平均要介護度	2.0(通所介護・短期入所生活介護)
●1日当たり実績	
短期入所	9.4名/日(定員9名)
通所介護	23.0名/日(定員30名)
訪問介護	6.0名/日
●居宅介護支援	延べ110件/月
●気仙沼市大島地域包括支援センター延べ相談件数	528件
●地域交流	
ミニデイサービス6地区延べ87名参加、大島地区市民運動会・大島公民館祭り・大島地区敬老会・大島地区福祉大会・小中学校合同運動会参加など	
●職員数	40名

円山ハーティケアセンター

●平均要介護度	1.9(通所介護)
●1日当たり実績	
通所介護	66.6名/日(定員80名)
●居宅介護支援	延べ1,301件
●研修参加・実施状況	
外部は新人職員研修、防火管理者研修、介護家族支援研修などに参加、内部は中堅管理職研修、業務内容勉強会、職員合同研修会などを実施	
●職員数	43名

医療法人稲生会

●延べ患者数	403名/月(訪問診療4,843件/年、外来242件/年、歯科574件/年)
●地域別患者数	
札幌市	195名
その他	37名
●訪問看護	424件/月
●訪問介護	48名/月
●医療型短期入所	155件/月
●職員数	69名

医療、保健、福祉の複合グループとして より一体感を高め、組織の変革を図る

「あるべきすがた」の実現をめざして

社会保障制度改革が推し進められる中、医療、保健、福祉事業を取り巻く環境はパラダイムシフトともいべき劇的転換点を迎えています。溪仁会グループはそうした環境変化に対応し、組織の持続的な成長を図るために、中期経営計画である「ビジョン溪仁会2020」を策定しています。各病院、施設、事業所は同ビジョンに基づき、自分たちの「あるべきすがた」を掲げ、その実現に向けて事業活動を展開しています。

2018年度は、前年までに大型プロジェクトが完了し、経営の質の向上に専念する年となりました。各病院、施設、事業所が目標として設定したKPI(重要業績評価指標)の達成をはじめ、新たなサービスの創出や課題解決に取り組みました。医療法人においては、病院やクリニックがそれぞれの機能を発揮し、病床稼働率の向上やサービスの充実に努めました。今後はさらに内部体制の整備や病院間のコミュニケーションを深め、多様化するニーズに答えていくことが重要になります。社会福祉法人は居宅サービスや在宅復帰支援にも積極的に取り組み、介護報酬改定に対応しています。また、独自の中期経営計画である「ビジョン福祉40」を核に、今後の事業展開や組織のあり方の検討を進めています。

2019年度は、2020年度のビジョン実現に向けてあるべきすがたを「実現しているすがた」へと昇華させることをめざしています。これまでの取り組みで見えてきた課題を解決し、溪仁会グループとしての価値をより鮮明に打ち出すことで、あるべきすがたへの実現に近づかずにはなりません。次の中期ビジョンも見据えながら、それぞれの目標に到達してほしいと考えています。

新たな価値を生み出すために変革の精神を

ビジョン溪仁会2020では、「独創性」「一体感」「客観性」をキーワードに掲げています。このうち、客観性はさまざまな客観的データを根拠とした組織運営の促進であり、提供するサービスや業務プロセスを適正に分析・評価することで、質の改善を図ろうというものです。ICT(情報通信技術)の活用やKGI(経営目標達成指標)・KPIといった指標によって、活動を客観的に捉え、継続的に改善を図る体制が確立されつつあります。

独創性と一体感は、当グループでしか成し得ない新たな価値の創出と、グループ内の垂直連携の強化による地域包括ケアシステムのモデルづくりを意味します。医療、保健、福祉の複合事業体である当グループの強みを十分に活かし、存在意義を果たすには、グループ内のコミュニケーションを活性化させ、互いの特性や活動への理解を深める必要があります。病院や施設間の連携はここ数年でかなり進んできましたが、まだ互いの機能を十分に活かしてきれていないと感じる面もあります。

そこで検討しているのが、1つの相談窓口でグループ内外のさまざまな機能やサービスを集約し、情報提供や紹介を行うワンストップサービスの創設です。まずは医療法人でスタートし、将来的にはグループ全体に広げていくことを構想しています。

こうした新しい取り組みに戸惑う職員もいるでしょう。しかし、今の姿を見直し、変わっていくことも組織の成長には必要です。「現状を否定しなければ新しい価値は生み出せない」という変革の精神を職員の皆さんと共有し、実現したいと考えています。

地域を支える存在として揺るぎない組織を築く

2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震では、地域の方々の生活や生命を支えるという当グループの社会的使命をあらためて強く認識しました。各病院や施設が迅速に災害対応に当たり、日ごろ培ってきた力を発揮できたのは誇るべきことでした。

職員が団結して震災を乗り越えたことに象徴されるように、当グループは強い使命感を持って仕事に臨む人たちに支えられています。そうした職員が仕事にやりがいを感じ、さらに能力を伸ばすことができる環境づくりも重要なテーマです。私は若い人たちにもチャンスを与えることが大切だと考えています。たとえ小さなプロジェクトであっても、自ら考え、成し遂げることで喜びや達成感が生まれ、仕事への意欲も向上していくからです。

人財の育成は組織力の強化に直結します。医療、保健、福祉のサービスを支え、地域のよりどころとして存在し続けるために、これからも人づくりと組織づくりに尽力していきます。

「医療の質と経営の質の連鎖」で使命を果たす

当グループは「『ずーっと。』人と社会を支える」という社会的使命を達成するために、CSR経営を推進してきました。近年はCSRという言葉が組織内に根付いた一方で、それが形骸化してきているのでは、という思いもあります。ぜひ、職員の皆さんには事業理念やサービス憲章、職員行動基準を見直し、当グループが果たすべき社会的使命とは何か、今一度考えてほしいと思います。

激変する社会情勢の中では、ややもすれば財務面ばかりを評価しがちになります。しかし、ただ数字を追ってれば良いのか、財務が改善されれば結果を出したことになるのかといえば、そればかりではないと思うのです。

CSR経営を提唱した秋野豊明前溪仁会グループ理事長(現名誉会長)は、以前「医療の質と経営の質の連鎖」と述べられました。サービスの質が上がれば必ず経営も上向き、それによって得た収益を現場に再投資することでさらにサービスの質が上がっていくという考え方です。「両立」ではなく「連鎖」とされたところに秋野会長の理念が込められており、当グループが発展を続ける上で大切な指針となる言葉だと感じています。

今後も医療、保健、福祉を支える組織として、地域に根ざした事業を展開するとともに、これからも独創的で質の高いサービスの創出に挑み、「溪仁会ブランド」の価値を高めていく所存です。時代の変化の中にあっても私たちの使命を見失うことなく、あるべきすがたの実現をめざしてまいります。

溪仁会グループ最高責任者
医療法人溪仁会 理事長

田中繁道





中央大学
全学連携教育機構 客員教授
日本経営倫理学会 理事
萩野 博司 (おぎの・ひろし)

【プロフィール】朝日新聞ニューヨーク支局員、論説副主幹、東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部教授などを経て、2019年より中央大学客員教授。14年より苫小牧埠頭株式会社社外監査役。ほかに特定非営利活動法人「日本コーポレート・ガバナンス・ネットワーク」執行理事、日本経営倫理学会理事。著書に「日米摩擦最前線」「問われる経営者」「英国の企業改革」など。

実体験の重さ

巻頭特集「あの日の震災から私たちが学んだこと」は一気に読んでしまいました。長い間の取材経験でも、現場を踏んで初めて分かることが数多くありました。北海道胆振東部地震の体験が皆さんの心に深く刻み込まれていることは、意欲的な特集記事から伝わってきました。

だれでも食料の用意や停電への備えが重要なことはわかっていますが、あれほど停電が長引くとは考えられませんでした。3日程度の食材の備蓄は心強いにしても、それを食べ尽くしてしまえば深刻な事態となります。

自家発電も当座の危機を乗り越えるには有用でも、いつまでも頼れるものでないことも痛感させられました。手稲溪仁会病院のように、通常の施設維持なら3日は持つ重油も、CTやMRIなどを稼働させれば30時間がやっとなったのは、重い教訓でしょう。

職員への配慮

もう一つ考えさせられたのが、職員への対応の大切さです。非常の事態になると、真面目な組織や職員であるほど、自分のことは後回しにしがちです。しかし、しっかりと考えるべきです。「職員のお子さんを受け入れたが、食事をどうするのかまでは考えていなかった」「職員を守るという観点からは、もっと慎重に行動基準を決めておくべきだった」「職員用の食事は盲点だった」といった証言の数々は今後の備えに活かさなければなりません。

肝心の職員が動けなくなれば、助けを求めている方々に手を差し伸べられなくなる。とりわけ人手の補充が利かない災害時については、日ごろ以上に配慮すべきでしょう。

心強い報告

心強いのは、こうした反省を真摯に受け止め、グループを挙げてBCPの作成や防災マニュアルの再整備、長期間停電や冬の災害発生を想定した防災訓練などを実施するとともに職

員用の非常食や飲料水の備蓄を進めているとの報告があることです。事業理念である「安心感と満足の提供」を実現するためにも、念には念を入れて取り組むことを切望します。

地元の人々から寄せられた支援は、日ごろの貢献のたまものでしょう。米や野菜を提供してもらったり、自家発電機のトラブルを直してもらったり。コミュニティとのかかわりの深さは、こうしたときに形になって表れます。住民の方も交えた防災訓練など、すべての施設で実施してもらいたいものです。

SDGsを前面に

巻頭特集に続くActions2018にはわが意を得たりの思いです。SDGsを前面に据え、17分野の目標のどれに当てはまるかを示すことで、読み手の理解も深まり、行動につながります。

地域との連携について、座談会の中で「職員たちと町内会、地域にある法人、商店街を結びつけるネットワーク」のアイデアが出ています。大いに期待したいものです。

めざす方向をしっかりと

社会福祉士、看護師など幅広い職種の代表13名が4年間をかけてグループの将来像を論議し、提言する「夢プロジェクト」には、少子高齢化社会での組織の在り方についてリスク面も含めて踏み込んで論じていただきたいものです。当グループは2020年代以降の日本や北海道を支えるうえで欠かせない存在です。それだけに、そのめざす方向は大いに注目しています。

ベトナムからの留学生が介護職員として実践を重ねていることが紹介されています。若者が減る中で、国際化の流れをどう取り込むのか。単なる労働力の提供者というのではなく、グループの理念に沿った形で仲間としての受け入れ態勢を整え、キャリアアップの機会を用意することが求められています。

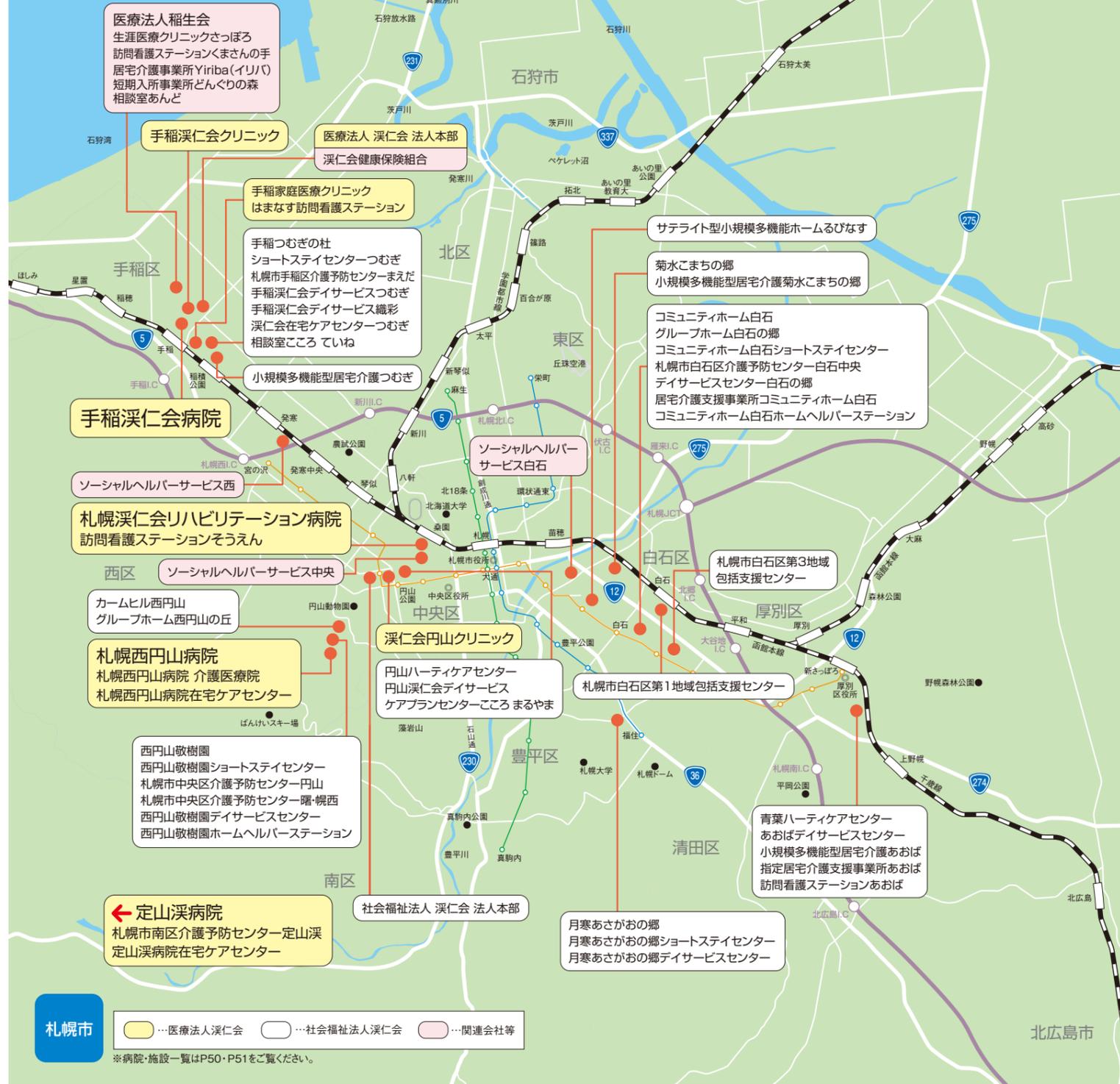
ISO26000対比表

溪仁会グループでは、社会的責任の国際規格であるISO26000を手引きとして、より確実にCSR経営を実行することをめざしています。CSRレポート2019に掲載した取り組みを、7つの中核主題に分類すると以下の通りになります。

中核主題	課題	溪仁会グループ行動基準項目	取り組み内容
組織統治	組織統治	すべて	溪仁会グループの社会的使命(P04) 溪仁会グループの事業理念(P05) 巻頭特集 北海道胆振東部地震REPORT(P06) 未来に続く法人像を描く「夢プロジェクト」(P24) マネジメント力を養成した医療・福祉の人財を現場へ輩出(P26) KMS内部監査員養成基礎研修会を開催(P27) 海外医療関係者の視察を受け入れ(P28) 医療、保健、福祉の複合グループとしてより一体感を高め、組織の変革を図る(P44)
人権	課題1: デューデリジエンス 課題2: 人権に関する危機的状況 課題3: 加担の回避 課題4: 苦情解決 課題5: 差別及び社会的弱者 課題6: 市民的及び政治的権利 課題7: 経済的、社会的及び文化的権利 課題8: 労働における基本的原則及び権利	③人権尊重	そらぶちキッズキャンプに参加(P21) チャリティー自販機を設置(P23) 臨床倫理研修会を実施(P27) Human Story(P30)
労働慣行	課題1: 雇用及び雇用関係 課題2: 労働条件及び社会的保護 課題3: 社会対話 課題4: 労働における安全衛生 課題5: 職場における人材育成及び訓練	⑥教育研修 ⑪職場環境	医学的研究の長年の成果・貢献が表彰される(P28) Human Story(P31) 自ら学ぶ意欲を応援する溪仁会グループ研究発表会(P32) NST専門療法士実地訓練を実施(P33) 組織横断的な研修会で交流も促進(P33) 北海道緩和ケア研修会を開催(P33) 組織を支える職員の健康を守る(P39)
環境	課題1: 汚染の予防 課題2: 持続可能な資源の利用 課題3: 気候変動の緩和及び気候変動への適応 課題4: 環境保護、生物多様性、及び自然生息地の回復	⑩環境保護	廃油回収の取り組み(P29) リサイクル回収活動と車いす寄贈(P29) おたるドリームビーチ清掃活動(P29) 施設周辺の清掃活動を実施(P29) 保育園児と共に環境活動(P29) 道民の森で植樹会を開催(P29)
公正な事業慣行	課題1: 汚職防止 課題2: 責任ある政治的関与 課題3: 公正な競争 課題4: バリューチェーンにおける社会的責任の推進 課題5: 財産権の尊重	④順法精神	JSA審査登録交流会に参加(P27)
消費者課題	課題1: 公正なマーケティング、事実に基づく偏りのない情報、及び公正な契約慣行 課題2: 消費者の安全衛生の保護 課題3: 持続可能な消費 課題4: 消費者に対するサービス、支援、並びに苦情及び紛争の解決 課題5: 消費者データ保護及びプライバシー 課題6: 必要不可欠なサービスへのアクセス 課題7: 教育及び意識向上	①顧客満足 ②品質管理 ⑤技術革新 ⑦チームワーク ⑧情報公開 ⑫個人情報保護	質の高い医療と介護で生活を支える介護医療院「にしまるポッケ」(P18) 訪問看護サービスの拠点オープン(P19) サイバー攻撃の脅威と現状についての勉強会(P27) 医療安全のプロフェッショナルに学ぶ(P33) 脳血管内科(脳神経内科)外来を開始(P36) 内視鏡センターがリニューアルオープン(P36) 手術支援ロボット「da Vinci」保険適用拡大に対応(P37) テクノエイドセンターの取り組み(P37) サービスの質を見直すアンケート調査の取り組み(P38)
コミュニティへの参画及びコミュニティの発展	課題1: コミュニティへの参画 課題2: 教育及び文化 課題3: 雇用創出及び技能開発 課題4: 技術の開発及び技術へのアクセス 課題5: 富及び所得の創出 課題6: 健康 課題7: 社会的投資	⑨地域重視	ステーキホルダーダイアログ 40年、町とともにずっと(P14) 開設20周年の記念イベントを開催(P19) 地域活動を通して、暮らしやすいまちづくりにも参画(P20) 自治体と共催で難病研修会を実施(P21) 小学生に歯の健康を伝える(P21) ボランティアによるロビーコンサート(P21) 在宅事業所と地域とのかかわりを考える「地域と共にずっと」を開催(P22) 地域の交流を図る医療&福祉イベントを実施(P23) 法人開設5周年記念パーティーを開催(P23) 子どもの在宅ケアを知ってもらう機会に(P23) 海外看護師に日本の医療を現場で学ぶ機会を提供(P28) 第69回日本病院学会の学会会長を務める(P28) 介護の仕事の魅力を伝える「未来へつなぐ福祉フェスタ」を開催(P34) 看護に関心を持つ高校生に体験の機会を(P35) 中学生が外科医師の仕事を模擬体験(P35) 高校生が介護施設入居者と交流(P35) リサーチ型企業研修の中学生を受け入れ(P35) 介護・福祉現場の未来を協働で考える(P35)

地域とともに、医療・保健・福祉を見つめて 溪仁会グループマップ

溪仁会グループは、札幌市を中心に道央・道南・道外（気仙沼市）に事業所を展開しています。質の高い医療・保健・福祉の提供を通して、地域の皆さんに安心と満足を提供することをめざしています。



溪仁会グループ一覧

治療とケア 最新の医療技術と機器を備え総合医療を提供しています。救急指定医療機関として、24時間・365日あらゆる疾患・外傷の患者さんを受け入れています。

- 高度急性期・専門医療 手稲溪仁会病院**
札幌市手稲区前田1条12丁目1-40
☎011-681-8111
- 手稲溪仁会クリニック**
札幌市手稲区前田1条12丁目2-15
☎011-685-3888
- 手稲家庭医療クリニック**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-10
☎011-685-3920

リハビリと療養 看護・介護・リハビリテーションを中心とした医療サービスを提供しています。

- 回復期医療 札幌溪仁会リハビリテーション病院**
札幌市中央区北10条西17丁目36-13
☎011-640-7012
- 回復期・慢性期医療 札幌西円山病院**
札幌市中央区円山西町4丁目7-25
☎011-642-4121
- 慢性期医療 定山溪病院**
札幌市南区定山溪温泉西3丁目71
☎011-598-3323

保健 健康のチェックと病気の早期発見、健康管理、予防に関するサービスを提供しています。

- 人間ドック・健康診断施設 溪仁会円山クリニック**
札幌市中央区大通西26丁目3-16
☎011-611-7766

介護医療院
住まいと生活を医療が支える居宅系施設です。

- 札幌西円山病院 介護医療院**
札幌市中央区円山西町4丁目7-25
☎011-642-4121

介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)
日常生活に常時介護が必要で、自宅では介護が困難なお年寄りが入所し、食事・入浴・排せつなどの日常生活の介護や健康管理が受けられます。

- 西円山敬樹園**
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-631-1021
- 岩内ふれ愛の郷**
岩内郡岩内町字野東69-4
☎0135-62-3131

介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)
10名が1つの生活単位(ユニット)として暮らし、顔なじみのスタッフが日常生活のお手伝いをします。

- 月寒あさがおの郷**
札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35
☎011-858-3333
- きもべつ喜らめぎの郷**
虻田郡喜茂別町字伏見272-1
☎0136-33-2711
- 手稲つむぎの杜**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-3726

地域密着型介護老人福祉施設
定員29名以下の小規模な介護老人福祉施設で、介護・看護・機能訓練等のサービスを提供するとともに地域や家庭との結びつきを重視した施設です。

- 菊水こまちの郷**
札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64
☎011-811-8110
- るすつ銀河の杜**
虻田郡留寿都村留寿都186-95
☎0136-46-2811

介護老人保健施設
病状の安定期にあり、入院治療をする必要のない方に医療・保健・福祉の幅広いサービスを提供する、介護保険適用の施設です。

- コミュニティホーム白石**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-5321
- コミュニティホーム八雲**
二海郡八雲町栄町13-1
☎0137-65-2000
- コミュニティホーム美唄**
美唄市東5条南7丁目5-1
☎0126-66-2001
- コミュニティホーム岩内**
岩内郡岩内町字野東69-26
☎0135-62-3800

軽費老人ホーム(ケアハウス)
食事の提供、入浴の準備、緊急時の対応、健康管理および相談助言を基本サービスとして、自立の維持ができる施設です。

- カムビル西円山**
札幌市中央区円山西町4丁目3-21
☎011-640-5500

認知症対応型共同生活介護(グループホーム)
認知症の方が、小規模な生活の場において食事の支度・掃除・洗濯などを共同で行い、家庭的な雰囲気の中で穏やかな生活を過ごせるよう支えます。

- グループホーム 白石の郷**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-16
☎011-864-5861
- グループホーム 西円山の丘**
札幌市中央区円山西町4丁目3-21
☎011-640-2200

短期入所生活介護(ショートステイ)
事情により介護ができないときに短期間入所していただき、ご家族に代わって食事・入浴等日常生活のお世話をいたします。

- 西円山敬樹園ショートステイセンター**
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-631-1021
- コミュニティホーム白石ショートステイセンター**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-5321
- おおしまショートステイセンター**
宮城県気仙沼市廻館55-2
☎0226-26-2272

- 月寒あさがおの郷ショートステイセンター**
札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35
☎011-858-3333
- 岩内ふれ愛の郷ショートステイセンター**
岩内郡岩内町字野東69-4
☎0135-62-3131
- ショートステイセンターつむぎ**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-3726

地域包括支援センター
高齢者の誰もが、住み慣れた地域でその人らしい尊厳ある生活を継続できるよう支援しています。

- 札幌市白石区 第1地域包括支援センター**
札幌市白石区本通4丁目北6-1 五光ビル3F
☎011-864-4614
- 岩内町地域包括支援センター**
岩内郡岩内町字野東69-26
☎0135-61-4567
- 札幌市白石区 第3地域包括支援センター**
札幌市白石区本郷通9丁目南3-6
☎011-860-1611
- 気仙沼市大島地域包括支援センター**
宮城県気仙沼市廻館55-2
☎0226-25-8570

介護予防センター
高齢になっても、住み慣れた地域で、その人らしい自立した生活が継続できるように介護予防事業を行っています。

- 札幌市中央区 介護予防センター円山**
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-633-6056
- 札幌市中央区 介護予防センター曙・幌西**
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-633-6055
- 札幌市白石区 介護予防センター白石中央**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-5535

- 札幌市南区 介護予防センター定山溪**
札幌市南区定山溪温泉西3丁目71
☎011-598-3311
- 札幌市手稲区 介護予防センターまえた**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-3141

通所介護(デイサービス)
要支援1・2、要介護1～5と認定された40歳以上の方を対象に、食事や入浴、機能訓練や趣味活動などのサービスを提供します。

- あおばデイサービスセンター**
札幌市厚別区青葉町4丁目10-27
☎011-893-5000
- 西円山敬樹園デイサービスセンター**
札幌市中央区円山西町4丁目3-20
☎011-640-5522
- デイサービスセンターおおしま**
宮城県気仙沼市廻館55-2
☎0226-26-2272
- 円山溪仁会デイサービス**
札幌市中央区北1条西19丁目1-2
☎011-632-5500
- デイサービスセンター白石の郷**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-16
☎011-864-3100
- 月寒あさがおの郷デイサービスセンター**
札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35
☎011-858-3333
- 手稲溪仁会デイサービスつむぎ**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-2568
- デイサービスセンターすまいる**
美唄市東4条南5丁目1-4
☎0126-66-2525
- るすつ銀河の杜デイサービスセンター**
虻田郡留寿都村留寿都186-18
☎0136-46-2811

小規模多機能型居宅介護
小規模多機能型居宅介護菊水こまちの郷
札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64
☎011-811-8110

- サテライト型小規模多機能ホームるびなす**
札幌市白石区東札幌5条3丁目2-32-103
☎011-595-8461
- 小規模多機能型居宅介護あおば**
札幌市厚別区青葉町4丁目10-27
☎011-895-5000
- 小規模多機能型居宅介護つむぎ**
札幌市手稲区前田3条9丁目2-7
☎011-686-0300

指定居宅介護支援事業所
介護支援専門員(ケアマネジャー)が、介護保険サービス利用の申請手続きや、ケアプランの作成など介護保険に関するさまざまな相談に応じています。

- 溪仁会在宅ケアセンターつむぎ**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-2322
- 札幌西円山病院在宅ケアセンター**
札幌市中央区円山西町4丁目7-25
☎011-642-5000
- 定山溪病院在宅ケアセンター**
札幌市南区定山溪温泉西3丁目71
☎011-598-5500
- 居宅介護支援事業所コミュニティホーム白石**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-2252
- 指定居宅介護支援事業所あおば**
札幌市厚別区青葉町4丁目10-27
☎011-893-8761
- 居宅介護支援事業所すまいる**
美唄市東4条南5丁目1-4
☎0126-66-2525
- 居宅介護支援事業所やくも**
二海郡八雲町栄町13-1
☎0137-65-2121
- ケアプランセンターさつき**
岩内郡岩内町字野東69-26
☎0135-67-7801
- ケアプランセンターこころ まるやま**
札幌市中央区北1条西19丁目1-2
☎011-640-6622
- ケアプランセンターこころ ようてい**
虻田郡留寿都村留寿都186-18
☎0136-46-2811

札幌市障がい者相談支援事業所・札幌市障がい者住宅入居等支援事業所
障がいがあっても、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう、さまざまな相談に応じています。

- 相談室こころ ていね**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-2861

訪問看護ステーション
看護師がご自宅に訪問し、主治医の指示に基づき、医療処置・医療機器を必要とされる方の看護を行っています。

- はまなす訪問看護ステーション**
札幌市手稲区前田2条10丁目1-10
☎011-684-0118
- 訪問看護ステーションあおば**
札幌市厚別区青葉町4丁目10-27
☎011-893-5500
- 訪問看護ステーション岩内**
岩内郡岩内町字野東69-26
☎0135-62-5030
- 訪問看護ステーションそうえん**
札幌市中央区北10条西17丁目1-4
☎011-688-6125

訪問介護(ホームヘルパーステーション)
ご家族で介護を必要とされる方が、快適な生活を過ごせるようご家庭に訪問し、日常生活をサポートします。

- 西円山敬樹園ホームヘルパーステーション**
札幌市中央区円山西町4丁目3-21
☎011-644-6110
- コミュニティホーム白石ホームヘルパーステーション**
札幌市白石区本郷通3丁目南1-35
☎011-864-2008
- ホームヘルパーステーションおおしま**
宮城県気仙沼市廻館55-2
☎0226-26-2272
- コミュニティホーム八雲ホームヘルパーステーション**
二海郡八雲町栄町13-1
☎0137-65-2122
- ソーシャルヘルパーサービス白石**
札幌市白石区菊水8条2丁目2-6
☎011-817-7270
- ソーシャルヘルパーサービス中央**
札幌市中央区北8条西18丁目1-17
☎011-633-1771
- ホームヘルパーステーションすまいる**
美唄市東4条南5丁目1-4
☎0126-66-2525
- ケアセンターこころ ようてい**
虻田郡喜茂別町字伏見272-1
☎0136-33-2112
- ソーシャルヘルパーサービス西**
札幌市西区発寒8条10丁目4-20
☎011-669-3530

地域医療 公立診療所の指定管理者として地域の医療を支えます。

- 泊村立茅沼診療所**
古宇郡泊村大字茅沼村711-3
☎0135-75-3651
- 喜茂別町クリニック**
虻田郡喜茂別町字喜茂別13-3
☎0136-33-2225

身体障がい者支援 身体障がいを抱えた方の在宅療養を包括的に支援します。

- 医療法人福生会**
■生涯医療クリニックさっぽろ ☎011-685-2799
- 訪問看護ステーションくまさんの手 ☎011-685-2791
- 居宅介護事業所 Yiriba ^{イリバ} ☎011-685-2791
- 短期入所事業所どんぐりの森 ☎011-685-2791
- 相談室あんど ☎011-676-3612

医療法人溪仁会 法人本部
〒006-0811 札幌市手稲区前田1条12丁目2-30 溪仁会ビル3F / ☎ 011-699-7500(代表)

社会福祉法人溪仁会 法人本部
〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2-1 サンビル5F / ☎ 011-640-6767

「ずーっと。」

人と社会を支える



私たち溪仁会グループは、
社会的責任(CSR)経営を推進します。
高い志と卓越した医療・保健・福祉サービスにより、
「一人ひとりの生涯にわたる安心」と
「地域社会の継続的な安心」を支えます。

ik 溪仁会グループ

〒006-0811 札幌市手稲区前田1条12丁目2番30号 溪仁会ビル3F
TEL 011-699-7500 FAX 011-699-7501

[溪仁会グループホームページ](#)

溪仁会グループ

検索

<http://www.keijinkai.com>

